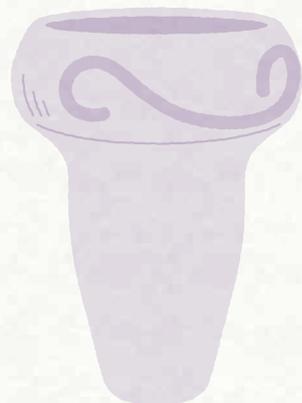


さいたま 埋文 レポート

2024
年報 44
[令和5年度版]



「あいち」

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、埼玉県の出資により昭和55年に設立された法人です。

当時、本部事務所は浦和市（現さいたま市）にありましたが、昭和62年に大里地域に整理事務所を開設し、その後、平成2年には本部事務所全体が現在地に移転し、以来今年で37年が経過します。

昭和62年当時の行政区域であった大里郡大里村は合併し、現在、熊谷市となっています。熊谷市はたいへん暑い地域だと思われていますが、大里地域は比企丘陵と荒川に挟まれた、緑豊かな場所です。

当事業団は、ここ大里地域の皆様に37年の間支えられながら、埼玉県の遺跡の発掘調査に尽力して参りました。地域の皆様の長年にわたる御支援に心から感謝を申し上げます。事業団では、県内各地域で遺跡の発掘調査を行っています。ここ大里地域の本部事務所では、日々職員が、発掘した遺物の整理や記録、保存作業等に当たっています。遺跡から発見された土器や石器などは、施設内の収蔵庫で一部を御覧いただくことができますので、近くにお越しの際などに足をお運びいただければと思います。

今年も昨年同様、世界的に暑い夏となっています。国連事務総長が、昨年7月に発言したとおり、まさに地球沸騰の時代が到来したと言えます。この埼玉の地においても昨年以上の暑さとなりました。

また、今年には自然災害が多く起こっています。このような、気候の急激な変化や自然災害は、現在まで続く人類の歴史でもたびたび起きています。数々の困難を乗り越えて歴史をつなげてきた先祖の姿を、発掘調査を通して目の当たりにすることができ、われわれに勇気を与えてくれます。

発掘調査の成果は、埋蔵文化財として保存され、活用されます。私たち公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の目的である、過去からの「物」を保存し、あるいは記録して、後世に残していく仕事は、未来に向かって進もうとする人の役に立つことだこの思いを新たに、これからも一層努力して参ります。

さて、令和五年度は、14遺跡で発掘調査を行いました。

砂原遺跡（行田市）や、船川遺跡（行田市）では、古墳時代から中世にいたる遺構

や遺物が出土し、河川のそばで営まれていた当時のくらしを知ることができました。また、金久保内出遺跡（上里町）では、古墳時代の住居跡が数多く見つかると、当時の人々の営みを詳しく知ることができました。同じ上里町の清水南遺跡では、中世の大型掘立柱建物跡が見つかりました。柱の穴には、柱を支える石が設置され、建物建築の技術を知ることができました。

整理事業については、発掘調査を終えた遺跡について、その成果を報告書にまとめる作業を行いました。令和五年度は、長竹遺跡（加須市）、栗橋宿関連遺跡（久喜市）のすべての報告書を刊行し、事業が終了しました。縄文時代の環状盛土遺構が発見された長竹遺跡や、江戸時代の栗橋宿の報告は、当時を復元する貴重な成果をみなさまにお届けすることができました。

埋蔵文化財に関する普及事業では、小学生を主な対象とした学習支援を小中学校40校で実施しました。「古代から教室へのメッセージ」と称するこの事業は、当事業団職員が学校の授業等に出向いて、実物の土器や石器に子どもたちが直接触れる機会を提供するものであり、各学校から好評をいただいております。

このほか、発掘調査の成果をいち早く公開する「遺跡見学会」、大型商業施設などにおいて展示を行う「ほるたま展」、発掘成果を遺跡の地元に表示する「里帰り展」、数多くのみなさまが参加できるよう初めて行ったネット配信の「ほるたまセミナー」などを実施し、多くの方々に御来場、御参加いただきました。いずれも新型コロナウイルス収束後の社会を意識しながら、また予防にも留意しながらの開催となり、御協力いただきました皆様には、心より御礼申し上げます。

さらには、博物館や市町村で実施される各種講座への職員派遣や大学生対象のオーブンカンパニーなど、文化財保護に係る普及啓発、人材育成支援にも取り組んでいるところです。

本書は、当事業団が令和五年度に実施しました事業の概要をわかりやすくまとめたものです。多くの皆様に、研究や学びの参考として御活用いただけましたら幸いです。

令和六年 十月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 加藤 健次



目次

I 令和五年度に調査をした遺跡

砂原遺跡（第2次）	行田市	1
船川遺跡（第2次）	行田市	3
平右衛門遺跡（第5次）	鴻巣市	4
宮前遺跡（第3次）	鴻巣市	6
金久保内出遺跡（第3次）	上里町	8
清水南遺跡（第2次）	上里町	11
三竹遺跡（第4次）	川島町	13
糠田古墳群（第2次）	鴻巣市	14
八木上遺跡（第7次）	狭山市	15
権現遺跡（第2次）	吉見町	16
二ノ耕地遺跡（第3次）	吉見町	17
小久住遺跡（第1次）	飯能市	18
塚原南遺跡（第1次）	東松山市	19
下長塚遺跡（第1次）	上里町	20

II 令和五年度に刊行された報告書

III 発掘資料の保存と活用

1 保存・活用事業（埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託事業）	22
2 その他の事業	24

IV 事業団の概要

1 設立の趣旨と目的	27
2 略沿革	27
3 組織の概要	27

砂原遺跡（第2次） 行田市

「立地と環境」

砂原遺跡は、秩父鉄道武州荒木駅から北方に約3kmの行田市須加地内に所在し、利根川堤防の南側に接して位置している。

江戸幕府による東遷事業以前の利根川は、会の川を流下していたとされる。これを示すように、会の川の南西岸には志多見砂丘をはじめ、いくつもの河畔砂丘が点在している。

会の川より上流側の行田市下中条や須加においても、砂丘状に砂が厚く堆積した地点が点在している。遺跡名の「砂原」をはじめ「砂畑」あるいは須加城跡など、周辺の地名・旧跡がその存在を示している。近隣住民によれば、かつて砂原遺跡の場所には、巨大な砂の丘が存在し、松林と石仏を安置した祠が頂上にあつたとされる。

このような会の川右岸に分布する砂丘状の堆積は、風成堆積による「砂丘」とは異なり、水成堆積による「自然堤防」の可能性が高い。会の川左岸にある志多見砂丘等の河畔砂丘とは形成の要因が異なる点は、利根川中流域の土地形成を捉える上で重要な資料となる。

遺跡周辺の地形は、加須低地に分類される。加須低地の形成には、関東造盆地運動と呼ばれる沈降運動と利根川によってもたらされる堆積物が大きく関わっている。台地が沈下し、その上を覆う洪水堆積物によって埋没台地が形成さ

れた。

旧石器時代や縄文時代の遺跡の多くは、埋没台地やその支台の上に分布している。旧石器時代では、行田市馬場裏遺跡、内郷遺跡、北大竹遺跡から石器や剥片が少数出土している。縄文時代では草創期の石槍が出土した神明遺跡が行田市内で最も古い。

弥生時代では熊谷市東部に広がる荒川扇状地の扇端において北島遺跡、前中西遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡などの遺跡が展開している。また、下流側の現利根川に沿った自然堤防上にの羽生市屋敷裏遺跡では、方形周溝墓が検出されている。

古墳時代になると周辺の自然堤防上に集落が営まれ、多くの古墳も築かれた。5世紀後半の特別史跡埼玉古墳群の稲荷山古墳の築造を始まりとして、利根川の旧流路周辺には大稲荷古墳群、6世紀代の酒巻古墳群などが造営された。利根川の旧流路（星川・元荒川）沿岸に営まれた5世紀から7世紀の集落遺跡としては、行田市小針遺跡、北大竹遺跡、築道下遺跡などで大規模な集落が展開していたことが明らかとなっている。これらの遺跡は9世紀代や10世紀代まで継続する。一方、利根川の現流路沿いでは5

世紀から7世紀の遺跡が少なく、羽生市屋敷裏遺跡などに限定されている。羽生市茂手木遺跡は、8世紀代に河畔の周辺に進出した集落である。こうした低地への進出は9世紀から10世紀

にかけて非常に活発となり、羽生市北尾崎北遺跡などでも遺構・遺物が検出されている。

中世の利根川は、現在の会の川を流れていた。須加周辺では、旧行田市立須加小学校から長光寺付近の高台が須加城跡と伝承される。『鎌倉九代後記』には、永享十二年（1440）に「色伊予守が須加土佐入道の城へ押し寄せ放火し



第19号竪穴住居跡（第三面）

たという記載が見られる。

「発見された遺構」

砂原遺跡第2次調査では、1次調査の近世の第一面、奈良・平安時代の第二面調査に続き、飛鳥時代の第三面と古墳時代前期の第四面の調査を行った。遺構は第三面で竪穴住居跡、土壇、溝跡、第四面で竪穴住居跡、土壇墓、土壇、溝跡、性格不明遺構、河川跡が検出された。他に第1次調査の際に深度が深く掘り残した井戸跡2基の調査を行った。なお、遺構番号は、第1次調査から継続して付した。

飛鳥時代（第三面）

地表から約2.2m下の褐色シルト質土の地山から竪穴住居跡10軒、土壇3基、溝跡1条を検出した。地形は、北西が高く南東に向かって緩やかに低くなっている。遺構は西側に多く南東にかけて希薄になっていく。

検出された10軒の竪穴住居跡は、いずれも残存状態が良好であった。確認されたすべてのカマドのソデは、地山が掘り

- 所在地
行田市大字須加砂原4766-1他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年1月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
2,187.80㎡
- 遺跡の種類別
集落跡
- 主な遺構
飛鳥（第三面）(住居跡10・土壇3・溝跡1)
古墳（第四面）(住居跡2・土壇墓1・土壇6・溝跡1・性格不明遺構6・河川跡1)

I 令和五年度に調査をした遺跡

世と見られる。明である。時期は、陶器片や漆碗の型式から中世と見られる。

また、性格不明遺構とした遺構の中には、残存状態が極めて悪く土壌墓と断定できないが第1号土壌墓と類似した遺構もあった。周囲に複数の土壌墓が展開していた可能性もある。

第1号土壌墓は、長軸約2.5m、短軸約1.4mの規模である。底面全体に炭化物が広がり、焼骨がまとまった箇所が見られた。また、中央部からピット1基が検出された。遺物は五領式土器と呼ばれる古墳時代前期の土師器の甕が4個体出土している。

この西側の谷近くの遺構は、河川跡によって削られていることが確認された。

第19号住居跡の覆土は砂質土であり、洪水などによって埋没したと見られる。東辺にカマドが設けられ、煙道は先端部まで残存していた。残存状況は遺構検出面から床面まで約50cmと良好であるが、遺物量は少なかった。

古墳時代前期(第四面)
地表面から約3.3m下の暗褐色の硬質なシルト質土の地山からは縦穴住居跡2軒、土壌墓1基、土壌6基、溝跡1条、性格不明遺構6基、河川跡1箇所を検出した。地形は、調査区の東西両側が谷状に落ち込み、中央からやや西寄りにかけて自然堤防が形成されている。遺構はこの自然堤防上を主体に展開している。特に西側の谷の肩部から遺物がまとまって出土した。この西側の谷近くの遺構は、河川跡によって削られていることが確認された。



第1号土壌墓跡 遺物出土状況(第四面)

砂原遺跡では、第1次調査及び第2次調査において、4世紀から現代に至る土地の利用と自

確認されていない。

令和5年度実施した第2次調査では、第三面で飛鳥時代の集落、第四面で古墳時代前期の集落が検出された。4世紀頃を中心とする第四面と7世紀頃を中心とする第三面の間に5世紀と6世紀に相当する古墳時代中期から後期にかけての遺構は検出されず、集落の断絶が確認された。また、古墳時代前期を遡る時期の遺構も確認されていない。

「まとめ」
令和4年度の第1次調査では、中世・近代の遺構が検出された第一面と、奈良・平安時代を中心とする遺構が検出された第二面の調査を行った。その結果、中世には畑、それ以前には奈良・平安時代の集落が営まれていたことが明らかになった。

第一面は、地表下1.0～1.5m下から、黒色シルト質土の遺構検出面が見られた。地形は、北東が高く南西に向かって低くなっている。第二面以前までは傾斜が逆転している。調査区東側にかけて砂層が厚く堆積していたことか

然堤防形成の変遷を捉えることができた。

まず、古墳時代前期の4世紀頃に、縦穴住居跡や土壌墓がつくられ集落が形成された。この段階では調査区の東側と西側の両側が谷状に落ち込んでおり、南北方向に発達した自然堤防上に遺構が検出された。確認されたのは集落の一部であり、その中心部は調査区外に展開していたと見られる。その後、シルト質の埋土が約80cm堆積し、5世紀から6世紀にかけての遺跡は確認されていない。

次に集落が形成されるのは、第三面となる7世紀後半頃である。第四面で見られた調査区東西の谷状の落ち込みはいずれも埋没が進み、集落域が広がる。しかし、集落の中心部は調査区西側に展開したと見られる。第三面と第二面の間にも若干の間層が認められ、洪水による被害を受けたと想定される。しかし大きな断絶はなく、集落は継続していたと見られる。

第二面は奈良時代から平安時代前半にかけての集落である。時期は8世紀代から9世紀代にかけてである。平安時代の遺構は第一面の黒色土層の下に掘り込みが確認でき、第二面から20cmほど下に奈良時代の掘り込みが認められた。地形はおおむね平坦で、わずかに東へ低くなっている。遺構は西端以外の調査区全域から検出された。時期ごとに若干、遺構掘り込み面の高さが異なることから、洪水の被害を受けつつも集落は廃絶せずに継続していたと見られる。

その後、近世から近代にかけて砂原遺跡に所在した砂の自然堤防は、上に祠が置かれ、洪水時には避難所として機能していた。しかし、戦後の高度経済成長長期にコンクリートなどに配合する良質な砂として掘削され、その大部分が姿を消した。



河川跡 遺物出土状況(第四面)

ら、調査区の東側方向に自然堤防の中心部が形成されていたと見られる。遺構は北東端以外の調査区全域で確認された。中世から幕末にかけての遺構である。

第二面から第一面にかけては、断絶があり、10世紀以降の平安時代後期から13世紀から14世紀にかけての鎌倉時代から室町時代の遺構は見られない。この段階に砂の水成堆積が進んだ。この時期にはこの土地で人々の活動が行われなかったことで砂が堆積したと見られる。また、度重なる洪水によって上流部で自然堤防が発達し、河川の流路が変化したことで堆積した土砂の性質が変わったことも要因として挙げられる。

その後、近世から近代にかけて砂原遺跡に所在した砂の自然堤防は、上に祠が置かれ、洪水時には避難所として機能していた。しかし、戦後の高度経済成長長期にコンクリートなどに配合する良質な砂として掘削され、その大部分が姿を消した。

ふながわ 船川遺跡（第2次） 行田市

「立地と環境」

船川遺跡は、利根川右岸に位置し、秩父鉄道武州荒木駅から北北西約3kmの行田市大字須加に所在する。妻沼低地から加須低地に広がる沖積地の中に形成された自然堤防上に立地する。

船川遺跡の周辺では、遺跡南側に大稻荷古墳群がある。径約20mの円墳である浅間塚古墳が現存しているが、多くの古墳は削平されている。昭和44年に2基の古墳が調査され、1号墳は径26mの円墳で、弧を描いた円筒埴輪列が出土し、6世紀初頭の築造とされている。2号墳は1号



調査区全景（西から）

行田市

墳の南東57mの水田下より、石室と見られる細長い礫が複数検出された。中から大刀、鉄鏃、刀子、轡が出土し、5世紀末の時期とされている。

遺跡東側の利根川下流にある砂原遺跡では、令和4、5年度に発掘調査が行われ、古墳時代や飛鳥時代、奈良・平安時代の竪穴住居跡や、中・近世の土壇、溝跡等が検出された。

利根川上流側の立野遺跡では、縄文時代のピットや遺物包含層、古墳時代の方形周溝墓、平安時代の竪穴住居跡や土壇、中・近世の井戸跡や溝跡等が検出された。また立野遺跡近くの酒巻古墳群では前方後円墳3基、円墳20基の計23基の古墳が確認されている。

船川遺跡と砂原遺跡の間の行田市立須加小学校跡地や長光寺付近は、須加城跡とされている。『鎌倉九代後期』や『鎌倉大草子』などには「宿城」と記載があるものの、築城や廃城の年代は判然としない。

「発見された遺構」

今回の調査で発見された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土壇、性格不明遺構、中世の井戸跡、溝跡、時期不明の土壇、溝跡、性格不明遺構、ピットが検出された。遺構番号は、第1次調査から継続して付した。

奈良・平安時代

竪穴住居跡で全体が確認できたのは2軒である。第1号住居跡は、北西側と南東側の壁の各々からカマドが検出された。南東側のカマドは大

きく、壁や天井部が厚く焼土化し、土師器羽釜や須恵器環が出土した。

第5号住居跡は、北側壁にカマドが検出され、焼土化した天井部が遺存していた。土師器甕、須恵器環が出土した。



第5号住居跡

中世

井戸跡からは13世紀から14世紀の青磁及び常滑焼、瀬戸焼、渥美焼の陶磁器・片口鉢が出土した。

第2号溝跡は、調査区東側を東西に走る。検出された長さ7.2mで、東端が調査区外へ延びる。第3号溝跡は第2号溝跡の西側に位置し、東西に約4.0m延び、北に直角に曲がり約2.0mで立ち上がる。14世紀代と考えられる土器が出土した。



土器集中部

「まとめ」

第2次調査では、奈良・平安時代及び、中世の遺構・遺物が検出された。

奈良・平安時代の竪穴住居跡から出土した遺物は、いずれも少量であった。3軒の住居跡からカマドが検出され、燃焼部や煙道部の焼土化が確認された。この遺跡では、竪穴住居跡の発見が初めてであり、貴重な発見と言える。

中世は、井戸跡と溝跡が検出された。第1次調査でも中世の火葬跡や井戸跡が見つかっており、中世の未知の集落の存在が明らかになり、貴重な発見となった。

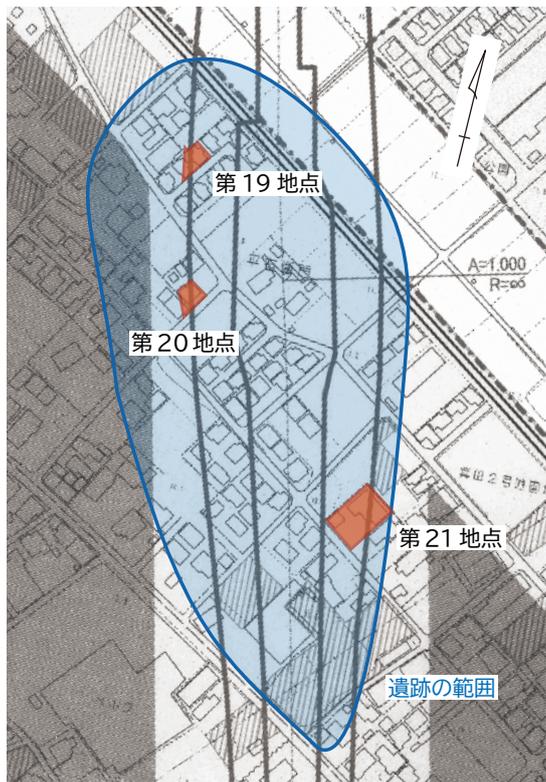
- 所在地
行田市大字須加4464-1他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和5年9月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
620.80㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
奈良・平安(住居跡6・土壇8・性格不明遺構1)
中世(井戸跡3・溝跡2)
時期不明(土壇1・溝跡1・性格不明遺構1・ピット3)

へい え も ん
平右衛門遺跡 (第5次) 鴻巣市

「立地と環境」

平右衛門遺跡は、JR高崎線北鴻巣駅の南東約2kmの鴻巣市箕田に所在する。標高約16mの大宮台地上の遺跡である。遺跡が所在する大宮台地は、遺跡周辺では北西方向へ半島状に延び、東側に元荒川、西側に荒川が流れている。周辺の遺跡はこの大宮台地や元荒川の自然堤防上に立地している。

平右衛門遺跡周辺の遺跡は、旧石器時代では大宮台地上の鴻巣市新屋敷遺跡からナイフ形石器や尖頭器のほか、石器集中地点や礫群が見つかっており、市内で最もまとまった資料である。縄文時代では、草創期の遺跡として、中三谷遺跡から有古尖頭器、また富士山南遺跡から爪



調査区位置図

跡、赤台遺跡、新屋敷遺跡、中三谷遺跡等、前期の集落が確認できる。中でも中三谷遺跡は、古墳時代後期以降まで続く集落である。古墳時代後期になると、箕田古墳群や新屋敷遺跡等で大規模な古墳群が形成される。

形文系土器が出土したが、遺構は明らかになっていない。早期は遺跡数が増加し、中三谷遺跡で押形文系土器、赤台遺跡では条痕文期の竪穴住居跡や炉穴群が見つかった。中期は集落も増加し、赤台遺跡、馬室小校庭内遺跡、新屋敷遺跡等で加曽利E式期の集落が営まれる。続く後期も赤台遺跡で称名寺式期の、中三谷遺跡で堀之内式期の竪穴住居跡群が発見された。弥生時代の遺跡は極めて少ない。登戸新田遺跡から吉ヶ谷式期の方形周溝墓、九右衛門遺跡から終末期から古墳時代前期にかけての集落跡が見つかっている。

古墳時代になると遺跡数は急激に増加する。宮前本田遺跡、大間原遺跡、馬室小校庭内遺跡、赤台遺跡、新屋敷遺跡、中三谷遺跡等、前期の集落が

確認できる。中でも中三谷遺跡は、古墳時代後期以降まで続く集落である。古墳時代後期になると、箕田古墳群や新屋敷遺跡等で大規模な古墳群が形成される。第19地点では、縄文時代、古墳時代、中・近世の遺跡として、城館跡として箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等が知られている。箕田館跡推定地である九右衛門遺跡では、詳細な時期は不明なもの、大型の堀跡や中世陶磁器類が多量に出土した。また、中三谷遺跡では「U」の字状に巡る堀跡が、新屋敷遺跡でも二重の堀跡が見つかり、中世の館跡と推定されている。このほか、平右衛門遺跡に近い宮前本田遺跡では、中・近世の掘立柱建物跡や井戸跡、地下式坑や溝跡が確認されており、周辺に館跡の存在が推定されている。

「発見された遺構」



第19地点 調査区全景

奈良・平安時代には、遺跡数が減少する。古墳時代の集落から継続する宮前本田遺跡や赤台遺跡、中三谷遺跡等が認められる。中・近世の遺跡としては、城館跡として箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等が知られている。箕田館跡推定地である九右衛門遺跡では、詳細な時期は不明なもの、大型の堀跡や中世陶磁器類が多量に出土した。また、中三谷遺跡では「U」の字状に巡る堀跡が、新屋敷遺跡でも二重の堀跡が見つかり、中世の館跡と推定されている。このほか、平右衛門遺跡に近い宮前本田遺跡では、中・近世の掘立柱建物跡や井戸跡、地下式坑や溝跡が確認されており、周辺に館跡の存在が推定されている。

近世、第20地点では中・近世、第21地点では古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

第19地点

調査区南半は、住宅の基礎に伴う攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではなかった。縄文時代の土壌は、調査区中央からやや北東の位置で見つかった。直径約0.6mの円形で深さ約0.2mの掘り込みであった。

- 所在地
鴻巣市大字箕田字平右衛門3619番地11他
- 実施期間(事業者)
令和5年8月～令和6年1月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
937.43㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
第19地点
縄文(土壌1)、古墳(住居跡4)、中・近世(土壌2・溝跡2・ピット8)
第20地点
中・近世(土壌66・ピット179)
第21地点
古墳(住居跡1)、奈良・平安(住居跡4)、中・近世(土壌64・井戸跡2・溝跡1・ピット69・性格不明遺構1)

古墳時代の第1号住居跡は、調査区の東隅、第2・4号住居跡は調査区の南隅、第3号住居跡は調査区中央からやや北西の位置で検出された。攪乱されるか、または調査区外に続くため、全体の規模・形状がわかるものはなかった。第3号住居跡は、遺存状態は良好ではなかったものの、カマドの一部と貯蔵穴が検出され、貯蔵穴周辺から土師器の甕が出土した。

中・近世の遺構は、調査区東側で重複して検出された土壇2基である。そのうち、第1号土壇は、長軸が北東・南西方向に向く長方形の掘り込みである。内部から中世の銭貨が出土し、土壇墓と推定される。溝跡2条はそれぞれ、第1号溝跡が第10地点の第1号溝跡、第7号溝跡が第11地点の第7号溝跡から続く遺構である。第1号溝は幅4m程で、深さは第7号溝跡と同じ1.4m程である。この二つの溝跡は、走行



第20地点 調査区全景



第21地点 調査区全景

方向から互いに関わり合いと推定される。掘り込みの形状と互いの位置関係からし字に屈曲、ないしは交差する可能性が高い。新旧関係は確認できなかった。

第20地点

攪乱が著しく、遺構の残存状況は良好ではなかった。

調査区の全面にわたりピットが検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴は確認できなかった。第25号土壇と第31号土壇は深さが1m以上あり、地下式壇と推定される。調査区中央よりやや西側で検出された第51号土壇は、長軸が北西・南東方向に向く長方形で、中世の銭貨が出土したことから、土壇墓の可能性がある。

第21地点

古墳時代の第2号住居跡は、調査区南端で検出され、南半は調査区外に続き、全体の規模は不明である。一辺6m程の比較的大型の住居で、カマドは北東に造られている。カマドの遺存状

態は良く、ソデには、底部を欠いた土師器甕2個体が逆さまに積み重ねられた状態で、構築材として再利用されていた。カマド周辺から多くの土器が出土したほか、主柱穴の覆土中から土師器環が1点出土した。

奈良・平安時代の調査区西隅で重複して検出された住居は、第4地点1a・1b号住居跡の南半部である。そのほか、第1号住居跡は調査区北西側、第3号住居跡は東側、第4号住居跡は南側で検出された。第1号住居跡は、一辺4m程の方形で、カマドは北西に造られる。覆土は浅く、遺存状態は良好ではないが、カマドの周辺から須恵器環が出土した。

中・近世の遺構は、調査区北東から南西方向にかけて、溝状の土壇群が2列並んで検出された。遺物はほとんど出土せず、詳細な年代は不明である。第21地点のピットの多くはこの溝より南東側で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴は確認できなかった。第17号土壇は、調査区中央よりやや西側で検出され、長軸が北東・南西方向に向く長方形の掘り込みである。深さは検出面から1.5m以上あり、ローム質の黄褐色土と黒褐色土で互層に埋め戻されていた。遺物はかわらけが出土した。第31号土壇は、第3号住居跡の南側に接して検出された。楕円形の掘り込みで、深さは2m以上と推測される。覆土から板碑や石製品の破片と見られる緑泥片岩や砂岩が多く出土した。

「まとめ」

縄文時代では、第19地点で当該期と推定される土壇が1基検出されたのみである。第21地点では、遺構の覆土から縄文時代前期の土器片が数点出土したが、明確な遺構は認められなかつ

た。

古墳時代から奈良・平安時代は、第19地点と第21地点で竪穴住居跡が数軒確認され、周辺の調査区からもこの時期の住居跡が検出されている。北側に元荒川低地を望む集落が、台地の縁辺部から中央部に広がっていたと考えられる。これまで平右衛門遺跡周辺では、同時期の集落跡の調査例は少ない一方で、近隣には箕田古墳群といった古墳なども分布している。この地域における古墳の造営や人々の生活の歴史を復元する上で、貴重な成果となったといえる。

中・近世に関しては、第19地点の溝跡は、平右衛門遺跡の過去の調査区で検出された大溝から連続するものである。なかでも第1号溝跡は、100m近い規模であり、台地の縁辺部に造られた館の堀跡と考えられる。

第19地点では、遺構として確認はできなかったが、南北方向（第7号溝跡）と東西方向（第1号溝跡）の2条の大溝の交差が推定された。こうした溝跡は、周辺でみつけた土壇や井戸などと含めて、方形区画の範囲と考えられ、館の存在が推定される。



第21地点 第2号竪穴住居跡
カマドソデ土器出土状況

みやまえ
宮前遺跡 (第3次) 鴻巣市

「立地と環境」

宮前遺跡は、鴻巣市大字宮前字本田みやまへに所在する。標高約15m～18mの台地に立地し、西に荒

川が南流する。調査区南側は、戦後の造成により平坦な地形となっているが、それ以前は、荒川によって形成された氾濫平野（低地）であった。近世以前は沼沢地であった。現在も湧水があり、市の水源が置かれている。

紀初頭の竪穴住居跡が1軒検出された。本遺跡の第1次、2次調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

源地在昭和51年（1976年）に、「古墳から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡」として埼玉県重要遺跡に選定されている。

調査区は北から南に向かって傾斜しており、遺構の分布、地質や環境が異なる。そのため、高所の北側を「台地」、低所の南側を「低地」、「台地」から「低地」へ移行する部分を「台地縁辺」と呼称する。

「発見された遺構」

第3次調査では、第2次調査に引き続き、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が検出された。

周辺には、台地縁辺部に縄文時代から近世にかけての遺跡が分布する。登戸新田遺跡のぼりしんでんでは、縄文時代後期初頭から前葉の遺物が、宮前本田遺跡みやまへほんでん、宮前本田北遺跡からは縄文時代中期後半の遺物が出土

昨年度から継続し、第2地点の調査を行った。検出された遺構は、縄文時代が竪穴住居跡、焼土跡、土壇、遺物包含層、古墳時代が竪穴住居跡、奈良・平安時代が土壇、中・近世が掘立柱建物跡ほったてじゅうたてぶつ、土壇、井戸跡、溝跡である。また、時期不明のピットが多数検出された。

第3地点は表土掘削のみを実施した。

縄文時代の遺構は、いずれも後期初頭から中葉（約4400～3500年前）の遺構と考えられる。竪穴住居跡の壁はやや不明瞭で、炉跡と柱穴が確認できたものが1軒、他の3軒は炉跡と考えられる焼土跡と柱穴の確認から、住居跡と判断した。土壇は、台地から台地縁辺にかけて7基が分布していた。特に第153号土壇

- 所在地
鴻巣市大字宮前字本田339-2 番地他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
3,100㎡(発掘調査) + 4,600㎡(表土掘削)
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
縄文(住居跡4・焼土跡4・土壇71・遺物包含層1)
古墳(住居跡1)
奈良・平安(土壇1)
中・近世(掘立柱建物跡3・土壇57・井戸跡6・溝跡1)
時期不明(ピット200)



遺跡全景

は、径2.6m、底径3.4m、深さ2.0mにも及び、底面中央に小さなピットが検出された。低地部分には土器を含んだ遺物包含層が堆積し、焼土跡6箇所が認められた。出土した土器は、上層では縄文時代後期中葉のものが主体で、中層では前期前葉から後期前葉のものが多



第153号土壇 土層断面



第156号土壇

後、材質の同定と年代測定のため自然科学分析を実施し、運搬を可能にするため固定処理を行った。固定処理は強化剤の水溶液を編組製品に浸透させた。編組製品の下部に付着している粘土がかなり強化され、編組製品自体に含まれている水分も半分程度強化剤に置換された。

「まとめ」

縄文時代については、台地上から木の実や根菜類の貯蔵施設であると考えられる土壇が、低地に望む台地の縁辺部から住居跡がそれぞれ集中して検出された。縄文時代後期の典型的な土地利用を示す集落形態である。

低地部分では黒色土が厚く堆積し、台地上で

い。下層には草創期から早期の遺物が含まれていた。草創期の爪形土器は、全国的にも発見例が少ないものであり、低地の谷底から検出されることも珍しい。

古墳時代の遺構は、台地縁辺から竪穴住居跡1軒が検出された。

奈良・平安時代の遺構は、台地上から土壇1基が検出された。

中・近世の遺構は、台地上で掘立柱建物跡3棟、土壇57基、井戸跡6基、低地の埋没土壇中から溝跡1条が検出された。溝跡は昨年度検出された第1号、第2号溝跡などに連続し、方形の区画を構成した館の掘跡である可能性が考えられる。

「編組製品の記録作業」

令和4年度、第2地点で出土した編組製品について、三次元写真測量記録を作成した。終了



調査区全景（低地）

は見られなかった縄文時代各時期の遺物が検出された。最下層からは、縄文時代草創期の爪形土器が検出され、縄文時代開始直後から土砂の流入による谷の埋没が始まったと考えられる。下層からは早期擦糸文期から条痕文期までの土器片が見つかり、断続的に周辺部での活動が想定される。下層から中層にかけては前期前半の土器が少量検出され、中葉から後半の土器は見られなくなることから、当該期には居住域としては利用されていないようである。

中期になってもこのような傾向は継続する。後期になって再び周辺地域での活動が活発化し、上層から後期初頭の土器片が少量、前葉の土器片が多量に検出され、後期前葉で最盛期を迎えている。後期中葉になると再び遺物が少なくなり、縄文時代の遺物はこの時期で途絶える。

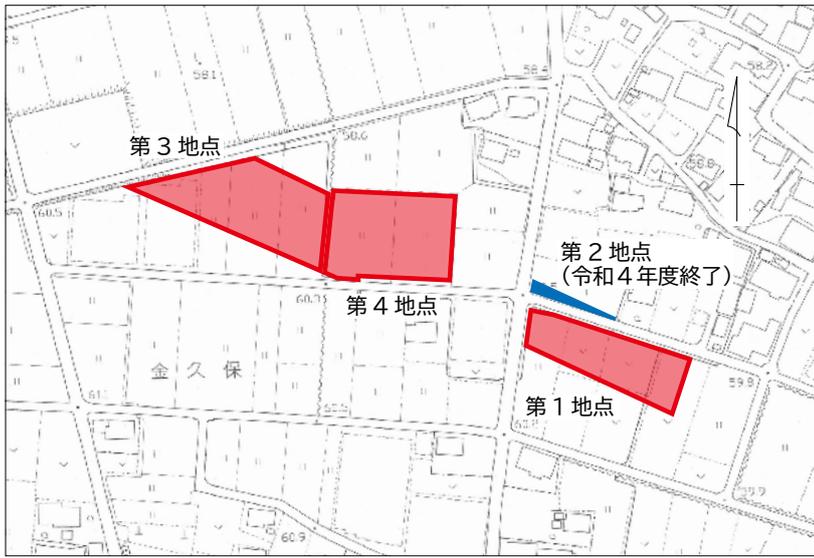
古墳・奈良・平安時代については、過去2年間の調査と合わせる、台地から台地縁辺では、竪穴住居跡は重複やカマドの付け替えが多く、継続して集落が営まれていたことが

明らかとなった。中・近世については、昨年度検出された大溝に連続すると考えられる溝跡が、低地の埋没土壇中から検出された。大溝で区画された内側からは、かわらけを大量に出土した土壇、井戸跡、地下式坑が検出されていることから、館の可能性が高いと考えられる。



第107号住居跡 遺物出土状況

I 令和五年度に調査をした遺跡



調査区位置図

奈良・平安時代の遺跡では、前述の田通遺跡、北稻塚遺跡のほか、寺西遺跡や油免遺跡が平安時代前期とされている。平安時代中頃から後期にかけては、田中西遺跡、日月遺跡、水引塚遺跡、中長遺跡、中堀遺跡があるが、竪穴住居跡の数が徐々に減少していく傾向が見られる。また、神流川沿いの大字五明やその周辺で

金久保内出遺跡は、昭和56年に県営圃場整備事業上里北部地区工事に伴い、上里町教育委員会が第1次調査を行った。令和4年度からは、一般国道17号（本庄道路1期）建設事業に伴い、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行



第1地点調査区全景

第3次調査では、第1地点、第3地点、第4地点を調査した。地点は、町道（三国街道）を挟んだ東側を第1地点、西側を第3地点とした。

「発見された遺構」

い、令和5年度は第3次調査となる。第1次調査では、古墳時代後半から奈良時代にかけての竪穴住居跡、第2次調査では、縄文時代の遺物集中、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、溝跡、中・近世の掘立柱建物跡、土壇墓、土壇、溝跡、ピットなどが検出された。

「立地と環境」

金久保内出遺跡は、児玉郡上里町金久保に所在し、JR高崎線神保原駅から北西3kmに位置している。遺跡の所在する児玉郡上里町は、東を本庄市、南を児玉郡神川町、神流川を挟んで西を群馬県藤岡市、烏川や利根川を挟んで北を佐波郡玉村町と接している。遺跡は神流川扇状地末端の台地上に立地し、

標高は約59・8mである。遺跡の北側と西側は、神流川が流れる低地に向かい傾斜している。この神流川は烏川、利根川と合流し、遺跡はこれから河川の結節点に位置している。このほかに、遺跡の北側に忍保川、東側には御陣場川など利根川水系の小規模な河川が存在する。上里町には、古墳時代後期の群集墳である旭・小島古墳群や大御堂古墳群、青柳古墳群、帯刀古墳群が存在する。また、金久保内出遺跡の北側に毘沙吐古墳群が位置しており、周辺から埴輪片もわずかながら出土している。古墳時代の集落遺跡には、神流川扇状地の原遺跡、前原遺跡や田通遺跡、北稻塚遺跡、金久保内出遺跡がある。今年度調査が行われた下長塚遺跡においても、古墳時代の竪穴住居跡が7軒確認されている。金久保内出遺跡において、見つかった竪穴住居跡のほとんどが古墳時代で、周辺には古墳時代の集落が広く分布していたと考えられる。

五明廃寺より出土した瓦は、上野国新田郡の寺井廃寺（現・群馬県太田市）や佐位郡の上植木廃寺（現・群馬県伊勢崎市）と文様が共通しており、上野国との関連が指摘されている。鎌倉時代の遺跡として、金窪城（館）跡が金久保内出遺跡の北東にある。また、神流川に沿うようにして、安保氏館跡、長浜氏館跡、勅使河原氏館跡など、鎌倉武士団丹党に関係する館跡が見られる。戦国時代末期の滝川氏と後北条氏が神流川を挟んで衝突した神流川合戦では、金窪城跡が滝川方の攻勢によって落城したとの記録が残る。

所在地
児玉郡上里町大字金久保989他
実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年3月(国土交通省関東地方整備局)
調査面積
8,228㎡
遺跡の種類
集落跡
主な遺構
第1地点
縄文(土器集中2)、古墳(住居跡2)、奈良(住居跡2)
第3地点
縄文(住居跡1・土器集中1)、古墳(土器集中5・住居跡34・土壇20・ピット85)中・近世(土壇墓3・土壇160・溝跡7・柵跡1・ピット450)
第4地点
縄文(土器集中1)、古墳(住居跡16)、中・近世(土壇墓2・土壇80・井戸跡2・溝跡18・ピット140)

金久保内出遺跡(第3次) 上里町



第1地点 第42号住居跡 遺物出土状況

今年度から調査した第4地点は、第3地点の東側に位置している。なお、第2地点の調査は令和4年度に終了している。調査では、縄文時代、古墳時代、奈良時代、中世の遺構が検出された。なお、遺構番号は第2次調査から継続して付した。

第1地点

第3次調査では、第二面の調査を行い、縄文時代の遺物包含層、古墳時代から奈良時代にかけての住居跡が検出された。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、調査区の西端と東端で、それぞれ縄文前期の土器集中2箇所が検出された。

古墳時代の遺構は、住居跡が2軒検出された。第44号住居跡は、南北軸約5.5m、東西軸約6mの大型の住居跡である。カマドの残存状況は良好で、燃焼部から煙道にかけて残存長約2mあり、左右のソデ内部からは、構築材に転用された土師器壺一対がほぼ完形で出土した。

奈良時代の遺構は、住居跡が2軒検出された。第42号住居跡は、床面の直上から8世紀後半と

考えられる須恵器環蓋が出土した。

第3地点

第2次調査では、第一面の調査を行い中・近世の土壌、溝跡、ピットなどが検出された。第3次調査では、第2次調査から続く第一面の調査を行ったのち、第二面の調査を行った。第二面では縄文時代の土器集中や、古墳時代の竪穴住居跡、土壌、ピット、土器集中などが検出された。

縄文時代の遺構は、調査区の西端から縄文時代前期の竪穴住居跡、土器集中1箇所が検出された。第82号住居跡からは、土器片、黒曜石製の石鏃や剥片などが出土した。

古墳時代の竪穴住居跡は多くが重複して検出された。古墳時代後期の住居跡が調査区西側に集中し、古墳時代終末から奈良時代初頭の住居跡は調査区の東側と西側に分布していた。後期の住居跡は、ほとんどが一辺5m前後の規模であった。第67号住居跡、第70号住居跡は残存状態が良好で、カマドの燃焼部から土師器が伏せられた状態で出土し、カマド廃棄に伴う祭祀に関連する遺物と推測される。古墳時代終末から奈良時代初頭の竪穴住居跡は、残存状態が悪かった。調査区西側の



第1地点 縄文土器出土状況

区西側の



第3地点調査区全景

第83号・第84号・第86号住居跡からは、8世紀前半の土師器環や壺が出土した。調査区西側からは、古墳時代の土器集中箇所5箇所が検出された。なかでも、調査区中央北側より位置する6世紀代に形成された土器集中4は、南北7m、東西4mの範囲から多量の土器が出土した。遺物は土師器環や壺がほとんどである。土師器環は重ねられた状態で出土した。また、一部に須恵器台付長頸壺や白玉が確認できた。土器集中は周辺の竪穴住居跡と重複がなく、7世紀後半まで埋没せずに当時の地表面から確認できる状態にあったことが確認された。何らかの特別な意味を持つ遺構と考えられる。

第一面の中世の第458号・509号・511号土壌の3基は、人骨が残存していた土壌である。第458号土壌は、横向きで

屈葬されていたと考えられる。人骨の一部のみ見つかった。人骨の大きさから成人と見られるが、性別は不明である。第509号土

壌は、横向きで屈葬され、東向きに埋葬されたようである。脚部から胸部にかけて永楽通宝6枚が出土した。人骨の大きさから成人と見られる。第511号土壌は、頭部及び上半身は西を向き、



第3地点 第70号住居跡



第458号土壌 人骨出土状況

I 令和五年度に調査をした遺跡



第4地点調査区全景

金久保内出遺跡は神流川扇状地に形成された遺跡である。第3次調査では、縄

「まとめ」

第一面では、中・近世の土壇墓、土壇、井戸跡、溝跡、ピット、第二面からは縄文時代の土器集中、古墳時代の竪穴住居跡が検出された。遺構の分布は、調査区の北側に集中しているが、調査区南西部分を中心に後世の攪乱を受け、遺構は希薄となっている。

縄文時代の遺構は、調査区南側より縄文土器

足を胡坐のように組んだ状態で埋葬されたと考えられる。人骨の大きさから成人と見られる。いずれも、第2次調査において検出された土壇墓群に連続するものと考えられる。これら土壇墓は、第22号溝跡を掘り込んでおり、土壇墓が形成された段階では、溝がある程度埋没していたと考えられる。

第4地点

第一面からは、中・近世の土壇墓、土壇、井戸跡、溝跡、ピット、第二面からは縄文時代の土器集中、古墳時代の竪穴住居跡が検出された。遺構の分布は、調査区の北側に集中しているが、調査区南西部分を中心に後世の攪乱を受け、遺構は希薄となっている。

縄文時代の遺構は、調査区南側より縄文土器

が出土する土器集中1箇所が検出された。古墳時代の第57号住居跡は、カマドの形状や共存する土器の特徴から、この地域において住居にカマドが導入された時期（古墳時代中期）のものと考えられる。出現期のカマドは、「初期カマド」とも呼ばれ、埼玉県内の調査事例は多くない。第60号住居跡は調査区南東で検出された。一辺約2・5mの小型の竪穴住居跡で、カマドは確認できなかった。遺構中央の床面直上より、6世紀後半の須恵器を模倣した土師器高坏が2点出土した。第63号住居跡は調査区北東で検出した。重複する第64号住居跡より新しい。遺構の中央付近から、滑石製の白玉が複数点出土した。調査区西側からは、後期の竪穴住居跡が検出された。第77号住居跡は、南北軸約4m、東西軸約3・8mの住居跡で、東辺にカマドが設置されている。出土した遺物から7世紀中頃と考えられる。

文時代、古墳時代、古代、中・近世の多くの遺構・遺物が検出された。

縄文時代では、縄文時代前期の土器を多量に出土する土器集中が4箇所検出された。

古墳時代から奈良時代では、5世紀から8世紀後半にかけての竪穴住居跡が検出された。古墳時代後期の約100年間、住居の建て替えを繰り返しながら集落が営まれていたことがわかった。竪穴住居跡群の分布は、第3地点の土器集中1の西側の一群、第3地点の南側から第4地点の北側の一群、第1地点の一群が確認できた。中でも、第1地点の一群は第3、第4地点の住居跡群より新しく、集落の北から南への展開が確認された。

なお、5世紀から遡る時期の遺構は確認されておらず、この土地は縄文時代前期から古墳時代中期まで、人々の生活域ではなかった可能性がある。加えて、8世紀後半以降は竪穴住居跡も検出されず、集落が断絶したと考えられる。



第4地点第63号住居跡

い。

調査した、金久保内出遺跡第1次調査において、8世紀後半以降の平安時代にかかる遺構は確認されていない。

第1地点の南側を調査した、金久保内出遺跡第1次調査において、8世紀後半以降の平安時代にかかる遺構は確認されていない。



第4地点第63号住居跡 白玉出土状況

中・近世では、第4地点から新たに井戸跡が2基検出された。どちらも石組みの井戸で、同時期の掘立柱建物跡に付随していた可能性が考えられる。第2次調査にて検出された大型掘立柱建物跡の第22号溝跡の覆土中から、土壇墓が2基確認された。当初、第22号溝跡の形成時期は、調査区北東に位置する金窪城に付随する施設と捉えて戦国時代末期と考えていた。しかし、土壇墓群が展開した時期にはすでに埋没が進んでいたと考えられる。

第3次調査では、古墳時代における金久保内出遺跡の人々の営みを詳細に確認することができた。一方、8世紀後半に起きた集落断絶の理由などについては、今後明らかになると考えられる。また、中世においては、上里町内でも発見例の少ない14世紀の遺構が確認された。遺跡の北に位置する金窪城との関係や、上里町の中世の様相を解明する貴重な発見となった。

清水南遺跡 (第2次) 上里町

「立地と環境」

清水南遺跡は、JR高崎線神保原駅から北西に約1・4kmの上里町金久保地内に所在し、神流川によって形成された自然堤防上に立地する。

遺跡の周辺は、三つの河川が合流する。南西部から神流川が北流し、西部から流れる烏川と合流する。さらに北東部で烏川と利根川が合流する。清水南遺跡は、そうした河川の合流点に位置している。また北部を流れる烏川との間には、忍保川が東流している。

遺跡は、昭和52年に、忍保川の用水路新設工事に伴い第1次調査が実施され、古墳時代から奈良時代頃の集落跡が検出された。縄文時代の遺構は確認されていないが、遺構等から縄文前期の土器や石器などが出土しているため、周辺に集落が所在する可能性がある。

古墳時代になると周辺には、集落が営まれた。隣接する金久保内出遺跡では5世紀後半から9



調査区位置図

調査区は道路を挟んで3箇所に分かれている。東側を第1地点、西側を第2地点、北東部を第3地点とし、第1地点と第3地点を先行して調査し、その後第2地点の調査を実施した。

古代
古代の遺構は竪穴住居跡4軒、土壇1基が確認された。遺構は、主に第2地点の北側から第3地

代後半の須恵器土師器がまともに出土した。第3地点でも奈良時代後半の遺物が多く出土した土壇が検出された。



第3号竪穴状遺構

第1地点中央部から確認された第1号掘立柱建物跡は、長軸11・8m、短軸6・0mの規模である。柱穴が二重に巡り、母屋の周囲に下屋または濡れ縁が巡る構造と推測できる。建物の中央部にも柱穴が検出されたことから、床張りの建物と考えられる。柱穴内からは、母屋部分で30〜40cm、下屋部分で1・0〜15cm程の深さから柱を支える礎板石が検出された。特に中央部の礎板石が大きく、幅、厚さともに40cm程ある石が据え付けられていた。また礎板石が複数確認された柱穴があることなどから、何度か建て替えられたと考えられる。

第1号掘立柱建物跡の南側には、竪穴状遺構が8基検出された。8基のうち3基が断面形態がすり鉢状になるもの、5基が断面形態が箱形

「発見された遺構」

清水南遺跡第2次調査では、古代の集落跡と、中世の掘立柱建物跡および区画施設と考えられる溝跡が確認された。

世紀後半までの竪穴住居跡が確認されていることから、平安時代前期まで継続的に集落が営まれていたと考えられている。古墳時代から奈良・平安時代の集落は、神流川によって形成された自然堤防の縁辺部に多く分布する傾向がある。

中世では、金窪城跡が清水南遺跡の北西部に隣接する。平安時代後期に当たる治承年間(1177〜1181)に武蔵七党の一つである丹党に属する加治家季によって造られたという伝承がある。また元弘年間(1331〜1334)には金窪城が新田義貞によって修復され、畑時に城を守らせたという伝承も残る。

加えて、戦国時代には天正10年(1582)に発生した神流川合戦の際に、滝川一益によって攻め落とされたことでも知られている。



第2号竪穴住居跡

点にかけて検出され、集落は遺跡の北側に広がっていたと考えられる。竪穴住居跡はいずれも第2地点から検出された。西側から検出された第1

中世
中世の遺構は、竪穴状遺構8基、掘立柱建物跡4棟、土壇墓3基、火葬施設1基、土壇1基、溝跡4条が検出された。また遺物が出土しないため詳細な時期は不明だが、ピットのおお半が中世と考えられる。遺構は調査区全体に分布する。第1地点の南東部に遺構が密集するのに対し、第1地点の北東部および南西部と第2地点の東側は少ない。

第1地点中央部から確認された第1号掘立柱建物跡は、長軸11・8m、短軸6・0mの規模である。柱穴が二重に巡り、母屋の周囲に下屋または濡れ縁が巡る構造と推測できる。建物の中央部にも柱穴が検出されたことから、床張りの建物と考えられる。柱穴内からは、母屋部分で30〜40cm、下屋部分で1・0〜15cm程の深さから柱を支える礎板石が検出された。特に中央部の礎板石が大きく、幅、厚さともに40cm程ある石が据え付けられていた。また礎板石が複数確認された柱穴があることなどから、何度か建て替えられたと考えられる。

第1号掘立柱建物跡の南側には、竪穴状遺構が8基検出された。8基のうち3基が断面形態がすり鉢状になるもの、5基が断面形態が箱形

- 所在地
児玉郡上里町金久保 1133 他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月〜令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
4,159 m²
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
古代(住居跡4・土壇1)
中世(竪穴状遺構8・掘立柱建物跡4・土壇墓3・火葬施設1・土壇1・溝跡4)
古代〜近世(土壇49・溝跡6・ピット529)

I 令和五年度に調査をした遺跡



第1号掘立柱建物跡

第2地点の西壁際から検出された第10号溝跡は、規模が幅約2.2m、深さ1mで断面形態が箱形になる。検出された長さは20mで、残りは西側の調査区域外へと続いている。南側は地山が砂利層となっており、それを掘りこんで掘削されていた。覆土の上層には硬く締まったや内耳鍋の破片が出土した。

また溝跡の堆積土を掘り込んで造られた土壇墓が検出され、永楽通宝と天聖元宝が副葬されていた。中世後半となる室町時代後期から戦国時代頃には溝跡の埋没が進み、墓域の一部として利用されていたと考えられる。溝跡覆土の中層〜下層から、鎌倉時代から南北朝時代頃の遺物が出土した。溝跡の規模や形状からその頃に造られた区画溝と推察される。褐釉陶器は中国南方の製品と考えられる。関東地方では希少な遺物であり、特別な品物を手でできる人物がいた可能性がある。

第2地点の西壁際からは、土壇墓が3基確認された。うち2基からは遺存状態が悪いものの全身骨が検出され、銭貨が副葬されていた。判読可能なものには天聖元宝と永楽通宝があり、室町時代以降の墓と考えられる。また頭骨の一部のみが検出された土壇墓には、かわらけが副葬されていた。かわらけの形態から15世紀後半頃のものと考えられ、他の土壇墓も同時代の遺



第1号掘立柱建物跡 礎板石出土状況

粘土層が確認され、古い地割を継承する道路となっていた可能性はある。同層中からは、室町時代後期から戦国時代頃の摺り鉢



第1号火葬施設

構であると考えられる。

第2地点の北東部では火葬施設が1基確認された。平面形態がT字形になるもので、覆土下層には焼土や炭化物とともに大量の骨片が含まれていた。焼骨のため部位が判別できるものは少ないが、北側に頭骨の破片がまとまって検出され、横位で茶毘に付されたと考えられる。出土遺物がなく時期は不明だが、検出された土壇墓などの存在から中世段階のものである可能性はある。

「まとめ」

清水南遺跡では、古代の集落跡と、中世の遺構群が確認された。古代の遺構は第2地点の調査区北西部および第3地点で確認された。遺構の分布状況から、今回の調査区の北側に所在する金久保内出遺跡の古墳から平安時代の集落跡まで集落域が広がっているものと考えられる。

中世の遺構は調査区全域で確認された。第1

地点の中央部では大型の掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡から出土した遺物は無いが、周辺の遺構の出土遺物などから、鎌倉時代から南北朝時代頃の建物跡である可能性がある。

第2地点では調査区西壁際で区画施設の可能性がある第10号溝跡が確認された。溝跡の中層からは、鎌倉時代から南北朝時代頃の遺物が出土している。第1地点で検出された第1号掘立柱建物跡と方向が揃っていることから、同時期に存在した可能性がある。第1号掘立柱建物跡に伴う区画溝であった場合、鎌倉時代から南北朝時代頃の方形に区画された館跡となる可能性がある。溝跡はその後、区画施設としての機能を失って埋没が進んだ。溝跡周辺には室町時代後半頃に土壇墓が分布し、区画施設があった頃の地割が墓域の境界となっていた可能性がある。その後、戦国時代頃には道路として使用されていたと考えられる。

また、溝跡から出土した鎌倉時代頃の瓦は、出土例が少なく注目される。中世で瓦を葺く建物は寺院等である。瓦が複数出土していることから、中世寺院の存在が考えられる。上里町内では堂裏遺跡からまとまった量の中世瓦が出土している。これらは清水南遺跡から出土した瓦とは特徴が異なり、生産地が異なるか、堂裏遺跡とは時期の異なる寺院が存在した可能性がある。

調査の結果、中世を中心とした遺跡であることが明らかとなった。特に大型の掘立柱建物跡と、区画溝の可能性がある溝跡の調査は当時の地域史を考えるうえで大きな成果となった。今後の調査で東側に区画溝が検出されれば、今まで知られていなかった館跡の発見につながる可能性がある。

みたけ 三竹遺跡（第4次）川島町

「立地と環境」

三竹遺跡は、比企郡川島町南東端の出丸中郷地先に所在し、入間川と荒川の合流点に近い堤外地に位置している。

川島町は埼玉県のほぼ中央に位置している。西に越辺川や都幾川、東に荒川、北に市野川、南に入間川と四方を河川に囲まれており、自然堤防上に遺跡が分布している。三竹遺跡も、この自然堤防上に立地する。

川島町では、旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代では、前期後葉から終末に営



調査区全景

まれた芝沼堤外遺跡や東野遺跡などの集落が、地表面から4〜5m下に埋没して検出されている。

古墳時代から遺跡数が増加する。自然堤防上に平沼一丁田遺跡、白井沼遺跡、富田後遺跡など前期の集落が営まれている。しかし、集落としては長続きせず、廣徳寺古墳や愛宕塚古墳、あるいは三竹遺跡の平成22年（2010）の調査で発見された第1〜3号墳など、後期に築かれる古墳群の時代には連続していない。

中世以降、12世紀後半の埜地遺跡を始めとした遺跡が検出されている。町内出土の794基を数える板碑の年号を追うと、集落が断絶することなく営まれ続けたと考えられる。

近世に入ると、寛永6年（1629）に幕府が行った熊谷市久下の元荒川の付け替え（瀬替え）により、荒川が現在の荒川低地を流下する。流量が増した荒川は河川交通が活発となり、河岸や渡し場が営まれるようになった。三竹遺跡付近では、上尾市平方や畔吉の河岸が知られている。荒川に接続する入間川流域も河川交通網が広がり、遺跡の西側約400mには、金兵衛河岸（金兵衛渡し）があった。

第4次調査で検出された遺構は、中世の土壇、井戸跡、溝跡、近世の土壇、井戸跡、溝跡、ピット、時期不明の土壇、溝跡、ピットである。

中世

第7号井戸跡は径約1.5mの井戸跡である。土層から素掘りではなく、井筒として木桶等を設置して周囲を埋め戻すタイプの井戸であった

と考えられ、廃絶時に木桶は回収されたようである。陶器の破片等が出土した。掘り方の埋土中からは縄文時代後期の土器片が出土しており、調査区周辺に縄文時代の遺跡の存在が推測される。

第1号溝跡は、幅5m、深さ1m、総延長約70mにも及ぶ大溝である。第2号溝跡や第9号溝跡などいくつかの同一方向の溝跡と重複しながら、調査区を南北に縦断していた。令和4年度の調査で確認された大規模な区画溝に対応する可能性がある。北から南へと深くなるように掘削されており、入間川方向への排水を意図したと考えられる。最下層から、常滑産の甕など14世紀代の遺物が出土している。

近世

第12号井戸跡は径約1.5mの井戸跡である。土層から、第7号井戸跡同様に木桶等を設置して周囲を埋め戻すタイプの井戸であったと考えられ、廃絶時には木桶は回収されているようである。掘方の埋土下部からは焙烙や磁器碗の破片が出土している。

「まとめ」

三竹遺跡第4次調査の発掘調査では、中世、近世の遺構、遺物が検出された。なかでも、第1号溝跡は14世紀代までさかのぼる大溝である。令和4年度の調査成果とあわせれば、土地区画として掘削されたと推定できる。区画内の遺構から出土した遺物とともに、不明な点が多い川島町の中世を明らかにする良好な資料と考

- 所在地
比企郡川島町出丸中郷地先
- 実施期間(事業者)
令和5年12月～令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
1,300㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
中世(土壇2・井戸跡6・溝跡7)
近世(土壇3・井戸跡8・溝跡1・ピット12)
時期不明(土壇5・溝跡5・ピット50)



第1号溝跡

えられる。
なお、平成22年度（2010）調査や令和4年度の調査で検出された古墳群は今回の調査では検出されず、円筒埴輪の破片が数点出土したに留まった。

今回の発掘調査の結果、三竹遺跡は中・近世において、河川に面した経済活動の一端を担っていた遺跡であることが明らかとなった。



第1地点C区 第1号住居跡

ぬかたこふんぐん
糠田古墳群 (第2次)
鴻巣市

「立地と環境」

糠田古墳群は、JR高崎線北鴻巣駅から南へ約2.6kmの鴻巣市糠田地先に所在する。遺跡の南側には秩父地方を源流とする荒川が東流し、東側には糠田橋が架かっている。遺跡は大宮台地の北西端に立地している。遺跡周辺は表層を沖積土で覆われているが、これらの大半は寛永6年(1629)に行われた荒川の瀬替え以降に堆積したものと考えられる。第1次調査

では古墳時代前期の竪穴住居跡や中期の溝跡、後期の井戸跡が調査されている。

糠田古墳群周辺の遺跡を概観すると、古墳時代に遺跡数は増加している。古墳時代を通じて集落が営まれた遺跡としては、赤台遺跡、中三谷遺跡、生田塚遺跡がある。生田塚遺跡では竪穴住居跡、古墳跡や埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑が調査され、製作された埴輪は、新屋敷遺跡や笠原古墳群、行田市埼玉古墳群等に供給されている。

奈良・平安時代になると遺跡数は減少傾向にある。

中世ではいくつかの館跡が挙げられる。箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡、大間地区の源経基館跡等がある。

近世には荒川に糠田河岸が設けられ、舟運の拠点の一つになるとともに、「糠田の渡し」として人々の往来に使用されていた。

「発見された遺構」

第2次調査では、昨年度の第1次調査の第1地点A区とB区の間地点であるC区と、第1地点から約100m上流側の第2地点の二地点を調査した。遺構検出面の標高は、第1地点C区が約15m、第2地点は約14mである。

第1地点C区

竪穴住居跡は、古墳時代前期のもので、2軒は第1次調査の続きである。第1号住居跡は、一辺が約4.3m×4.7mの方形で、深さは約

0.2mである。北東寄りから炉跡が検出された。遺物は土師器の甕や器台の破片が出土した。第3号住居跡はB区で検出された竪穴住居跡の東側の一部である。一辺が約2.5mの方形で、深さは約0.2mである。

近世の第2号性格不明遺構からは、近世陶磁器や砥石などの石製品などが多く出土した。

第2地点

第2地点は幅が6m×16mと狭い調査区で、堤防の法尻を確保するため遺構の調査ができたのはさらに狭い範囲となった。

地表面から約2mの深さで厚さ約0.3mの遺物包含層が検出され、弥生時代から平安時代の土器が出土した。また、遺構は、この遺物包含層を精査していく過程で検出された。

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡5軒、時期不明の土壇2基、井戸跡1基、ピット3基である。竪穴住居跡は調査区外へ続き、全容を確認できたのは1軒のみである。

中央付近で検出された第1号住居跡は、一辺が約2.3mの方形で、深さは0.15mである。炉跡は検出されなかった。前期の土師器の甕や台付甕の破片が出土した。第1号住居跡の東側に隣接して検出された第4号住居跡は、一辺4m以上と推定され、深さは0.15mである。北東壁にカマドが構築されており、ソデの補強材として土師器の長胴甕が設置されていたほか、土鍾が出土した。

- 所在地
鴻巣市糠田地先
- 実施期間(事業者)
令和5年10月～令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
2,168.5㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
第1地点C区
古墳(住居跡4・溝跡11)、
近世(性格不明遺構1)、時期不明(土壇12・ピット32)
- 第2地点
古墳(住居跡5)、時期不明(土壇2・井戸跡1・ピット3) 弥生～平安時代(遺物包含層)

「まとめ」

第2次調査では、古墳時代及び近世の遺構が検出された。遺物は弥生土器や平安時代の土器が出土している。糠田古墳群を構成する古墳の墳丘や周溝といった遺構は検出されなかったが、第1地点C区で検出された溝跡からは円筒埴輪の破片が多数出土しており、古墳の周溝である可能性も残る。第1地点は古墳時代前期のものに限られ、その時期の集落が営まれていたと考えられる。それに対し、第2地点からは古墳時代後期の竪穴住居跡が検出され、第2地点周辺には古墳時代後期の集落が展開していたと考えられる。

『鴻巣市史』によれば、糠田地区の住宅地一帯で埴輪片が採集されている。なかでも遺跡の北東側に位置する聖泉寺境内の墓地からまるとまると埴輪片が採集されている。このことから遺跡の北側にかけて古墳群が広がり、第2地点が位置する南西側にかけて古墳群と同時期の集落が展開していたと考えられる。

また、古墳時代前期では、第1地点及び第2地点にかけて竪穴住居跡が確認されており、これまで知られていなかった古墳時代前期の集落が展開していたと考えられる。

ばちぎうえ 八木上遺跡（第7次） 狭山市

「立地と環境」

八木上遺跡は、狭山市大字笹井に所在し、入間市との市境に接する狭山市西端部に位置する。入間川中流域左岸の河岸段丘上に立地し、入間川を挟んだ対岸に、武蔵野台地、加治丘陵東端部を臨む。

今回の第7次調査は、第2～5次調査区の西側にあり、3段から成る段丘の西の中位段丘面に立地する。

狭山市域の遺跡を旧石器時代から概観する。旧石器時代は西久保遺跡が入間川左岸に立地し、石器集中や礫群が検出された。

縄文時代は、前期から中期にかけて遺跡が増加する。入間川左岸の八木前遺跡では、黒浜式



遺跡全景

から諸磯a式期の住居跡と土壇群が検出されている。中期になると遺跡数が急増する。八木上遺跡の東側に隣接する埼玉県選定重要遺跡の宮地遺跡では、勝坂式期から加曾利E式期の大規模な集落が検出された。後期になると遺跡数は減少し、晩期の遺跡は確認されていない。

弥生時代から古墳時代前・中期にかけても遺跡は発見されていない。古墳時代後期になると入間川左岸に笹井古墳群、右岸に稲荷山古墳群が形成される。

奈良・平安時代になると入間川左岸の八木北遺跡から川越市の霞ヶ関遺跡まで、集落跡が途切れなく帯状に連なって所在している。また、入間川を挟んだ遺跡の対岸には、武蔵国分寺の再建瓦を焼いた東金子窯跡群が広がっている。

中世には鎌倉街道上道が狭山市を南北に貫き、その枝道も多数確認されている。

近世になると、狭山市域は天領、川越藩領、旗本の知行地などに分割統治された。また、現在の集落にも近世・近代の歴史的景観が残されている。

「発見された遺構」

八木上遺跡第7次調査では、旧石器時代の遺物と縄文時代、奈良・平安時代、近世の遺構が検出された。

旧石器時代

第1号溝跡底面のローム層から黒曜石製のナイフ形石器が出土した。石器集中は検出できなかった。

縄文時代

縄文時代前期の集石土壇1基が検出された。

調査区東部で、集石土壇が検出された。円形の土壇の中に、被熱した破砕礫（焼礫）が検出された。

奈良・平安時代

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、土壇1基が検出された。竪穴住居跡のカマドソデの補強として用いられた平瓦、須恵器の坏が出土した。カマドの右ソデからは、チャートの大型礫と平瓦が直立した状態で検出され良好な状態で遺存していた。遺構の時期は8世紀末～9世紀初頭である。調査区中央からは、3間×2間側柱の掘立柱建物跡が1棟検出された。建物の軸方向は第1号住居跡の主軸方向と



第1号集石土壇

- 所在地
狭山市大字笹井字八木上2338-3外
- 実施期間(事業者)
令和5年11月～令和6年3月(埼玉県)
- 調査面積
1,954.22㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
旧石器(遺構なし)
縄文(集石土壇1)
奈良・平安(住居跡1・掘立柱建物跡1・溝跡3・土壇1)
近世(溝跡1・土壇8・畠跡4)
時期不明(溝跡3・土壇72・ピット36)

揃って検出された。

近世

溝跡1条、土壇8基、畠跡4箇所が検出された。土壇の多くは畠跡より新しい。第2号畠跡からは、陶磁器の小破片が少量出土し、遺構の時期は18世紀後半頃と考えられる。

「まとめ」

旧石器時代の調査では、ローム層中から基部加工ナイフ形石器、縦長剥片、石核が単独で出土し、旧石器時代の活動痕跡を確認することができた。八木上遺跡と周辺に旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。

調査区東部を中心に、縄文時代早期・前期の土器片が少量出土したが、明確な縄文時代の遺構は、第1号集石土壇のみであった。過去の調査では段丘中位面で前期中葉、上位面では前期末葉の集落が検出されている。

第7次調査では、奈良・平安時代の集落の一部を確認できたことが大きな成果である。特にソデ補強材として用いられた瓦の出土は東金子窯跡との関係を示すものとして注目される。溝跡の分布状況から、集落の本体は、調査区の南側に広がっていた可能性が高い。

I 令和五年度に調査をした遺跡



遺跡全景

第2次調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構が検出された。調査地点は、現道を境に西から第1・2・3地点と呼称した。第1地点は令和4年度の第1次調査区に隣接する。



第28号溝跡

跡で、第1地点に入ってからL字形に曲がる。第15号溝跡は調査区を南北方向に横断している。溝跡の中腹に幅0・6mの段が設けられている。最下層から常滑焼甕の破片が出土し、時期は13世紀と考えられる。

第2地点
古墳時代前期の第7号土壇は、住居跡の一部である可能性がある。土師器台付甕や壺、器台が出土した。第2号溝跡は、大規模な溝跡で、北東から南西方向に走行し、調査区外に向かって延びる。覆土の上層から、完形に近い土師器壺、台付甕、高坏、器台等が大量に出土した。平安時代の井戸跡からは、9世紀頃の須恵器の甕、坏等が少量出土した。

中世の第3号溝跡は、溝跡の中腹に幅0・4mの平坦な段が設けられていた。中世の陶磁器片が少量出土した。

第3地点
古墳時代前期の第25号・26号溝跡は、L字形に屈曲している。第25号溝跡からは、形のわかる土師器台付甕3点と多量の土師器破片が出土した。溝跡の形状や遺物の出土状況から、これらの溝跡は平面隅丸方形の周溝持建物跡の周溝部と考えられる。第28号・29号・31号・34号溝跡も同様に、平面形が隅丸方形の周溝持建物跡

の周溝部の可能性が高い。平安時代の第14号井戸跡は円形で、素掘りの井戸である。9世紀代と考えられる須恵器坏等が少量出土した。

中世の第23号溝跡は、南北方向に走行する溝跡で、第27号溝跡を壊していた。遺物は中世の渥美焼甕や常滑焼甕等が出土した。時期は、12世紀後半から13世紀前半代と考えられる。

「まとめ」
権現遺跡第2次調査では、主に古墳時代から奈良・平安時代と中世の遺構・遺物が検出された。そのうち、主体となったのは古墳時代前期である。住居跡は検出されなかったが、隅丸方形に浅い溝が巡る周溝持建物跡の周溝部の可能性のある溝跡が確認された。集落として約1世紀にわたり継続して営まれ地域における古墳時代前期の中核的な集落跡であったと考えられる。この地域の歴史を考える上で貴重な発見となった。

中世においては、第1・2地点から検出された第3号溝跡が、南側に方形の地割が残存する無量寺が隣接していることから、当寺院あるいは館跡に関連する可能性がある。

権現遺跡(第2次) 吉見町

「立地と環境」

権現遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在する。標高約14〜16mの自然堤防上に立地し、東に荒川、西に市野川が流れる。二丁耕地遺跡とは横見川を挟んで対峙している。

権現遺跡は、令和4年度に当事業団によって第1次調査が実施された。縄文時代、古墳時代前期、奈良・平安時代の遺構が検出されている。

「発見された遺構」

第2次調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世、

第1地点

古墳時代前期の第11号井戸跡は、上層から中層で土師器台付甕や甕の破片、最下層から器台が出土した。検出された溝跡のうち、第7号・第17号・第18号溝跡は、第1次調査で検出された第1号溝跡とともに、方形の区画を形成している。

奈良・平安時代の第2号住居跡は、床面から須恵器坏や甕が出土した。時期は8世紀後半と考えられる。

中世の第3号溝跡は、第2地点から延びる溝

- 所在地
吉見町大字久米田209ほか
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年3月(埼玉県)
- 調査面積
1,080㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構

第1地点

古墳(土壇3・井戸跡5・溝跡4・ピット3・焼土跡1)、奈良・平安(住居跡1・土壇3)、中世(溝跡2・ピット3)、近世(溝跡7)、時期不明(ピット6)

第2地点

古墳(土壇9・溝跡4・ピット9)、奈良・平安(土壇1・井戸跡2)、中世(溝跡1)、時期不明(土壇2・ピット32)

第3地点

古墳(住居跡1・土壇8・井戸跡1・溝跡12・ピット23)、奈良・平安(土壇1・井戸跡1・溝跡2・ピット12)、中世(土壇1・溝跡1)、時期不明(土壇3・ピット124)

二ノ耕地遺跡（第3次）吉見町

「立地と環境」

二ノ耕地遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在し、標高約14～16mの自然堤防上に立地する。遺跡の東に荒川、西に市野川が流れ、権現遺跡と横見川を挟んで対峙している。

二ノ耕地遺跡は、平成28年度に吉見町教育委員



第3地点

第4地点

遺跡全景

員会によって第1次調査、令和4年度に当事業団によって第2次調査が実施された。今回の調査区は、第2次調査区第1地点と第2地点の間に当たる。西に隣接する三ノ耕地遺跡では、4次にわたって調査が実施されており、第1～3次調査を吉見町教育委員が、第4次調査を当事業団が実施している。調査では、縄文時代晩期の水場遺構や住居跡、

古墳時代前期の方形周溝墓群および県内最大の方後方形墳墓が特筆される。また、奈良・平安時代の溝跡は、古代道路跡の側溝と考えられている。

「発見された遺構」

今年度の調査地点は2地点で、西側を第3地点、東側を第4地点と呼称した。事業に伴う調査地点は西から第1地点、第3地点、第4地点、第2地点となる。

第3地点

古墳時代前期の第1号方形周溝墓は、南半部が調査区外に延びている。北側の周溝のみで、埋葬施設は検出されなかった。遺物は、土師器



第3号住居跡

土師器甕や坏、須恵器甕等が出土した。時期は9世紀後半と考えられる。また、掘立柱建物跡が9棟検出された。いずれも側柱建物である。第6号掘立柱建物跡は桁行6間と大規模である。いずれも時期は8世紀後半と考えられる。

中世の第57号土壇は平面楕円形で、最下層から出土した瓦質土器内耳鍋の破片は、15世紀代と考えられる。

近世の第41号溝跡からは、肥前磁器碗、志野磁器皿、瀬戸美濃の摺鉢等が出土し、時期は17～18世紀代と考えられる。

第4地点

古墳時代前期の第31号井戸跡は、平面円形で、底面からほぼ完形の赤彩された壺が1点出土した。第57号溝跡は、南に向かって蛇行しており、底面は南に向かって低くなっていた。上層から下層にかけて土師器甕や高坏、東海系の土師器壺の口縁部等が出土した。

奈良・平安時代の第11号掘立柱建物跡は、4間×2間の側柱建物である。8世紀後半の須恵器坏が出土した。

近世の第29号井戸跡は平面楕円形で、断面形が円筒形の素掘りの井戸である。外径0.6mの

- 所在地
吉見町大字久米田209ほか
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年3月
(埼玉県)
- 調査面積
1,760㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構

- 第3地点
古墳(方形周溝墓1・井戸跡1)、奈良・平安(住居跡1・掘立柱建物跡9・土壇2・溝跡3・柱穴64)、中世(土壇1・溝跡1)、近世(土壇3・井戸跡1・溝跡10・ピット51)、時期不明(土壇2・ピット10)
- 第4地点
古墳(土壇2・井戸跡1・溝跡2)、奈良・平安(住居跡1・掘立柱建物跡2・土壇3・溝跡1・性格不明遺構1・ピット19)、近世(井戸跡1・溝跡1)、時期不明(土壇3・ピット7)

「まとめ」

第3地点では古墳時代前期の方形周溝墓が単独で検出された。方台部は削平を受け、埋葬施設は検出できなかった。出土遺物は土師器の壺、瓢壺や器台等が主体であり、甕は少量であった。三ノ耕地遺跡で見つかった周溝墓群との関連が考えられる。

また、井戸跡の最下層から完形に近い土器が出土しており、井戸廃絶に伴う儀礼が推定される。

奈良・平安時代の掘立柱建物跡は、11棟検出され、主に側柱建物で調査区全体に分布している。特に、調査区中央では、軸方向の異なる建物跡が切り合って検出された。これは、建物跡が複数の時期にわたる可能性を示す。

第4地点で検出された溝跡は、方形に土地を区画していたと推測できる。令和4年度の調査成果で検出された、同様の特徴がある溝跡から出土した遺物と合わせて、今後、吉見町の中世を明らかにする上で重要な資料と考えられる。

小久住遺跡 (第1次) 飯能市

「立地と環境」

小久住遺跡は、飯能市西部の山間地、入間川左岸の幅の狭い河岸段丘上に所在する。これまでの発掘調査事例はないが、飯能市の遺跡分布図によれば、縄文時代前期の繊維土器と、中期の加曾利E式の土器片が採集される遺跡として知られていた。

飯能市は埼玉県の南西部に位置しており、西部は秩父郡市に接する山間地、東部は入間川によって形成された飯能台地となっている。西部は約8割が山地で、高麗川、成木川そして入間川が東に向かって流れ、これらの河川に沿って狭い平地が形成され、ここに人家が集中している。市内には177箇所の遺跡があり、旧石器時代から人々の活動の痕跡が確認されている。



遺跡全景

縄文時代の遺跡は多い。草創期では、小岩井渡場遺跡から微隆起線文土器や爪形文土器が出土している。早期は小岩井渡場遺跡から住居跡が1軒検出されている。小久住遺跡上流の山間に倉久保遺跡、堂ノ根遺跡、天王前遺跡などが所在する。前期になると、市内ほぼ全域に遺跡を確認することが出来る。

中期にはさらに遺跡数が増加し、中期後半の遺跡は80箇所以上を数える。加能里遺跡では縄文時代中期の住居跡が60軒以上検出された。中期以降も後・晩期まで集落が長期的に継続された。中橋場遺跡は、縄文中期の終わりから晩期の遺跡で、配石遺構が多数検出された。

古墳時代の遺跡は少なく、加能里遺跡では古墳時代前期末から中期初頭の住居跡が検出されている。

奈良時代になると、南小畦川流域を中心とする人々が住み始め、多くの遺跡が残されている。代表的な遺跡として知られている張摩久保遺跡からは、奈良・平安時代の多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

平安時代(9世紀以降)になると、高麗丘陵や加治丘陵の裾部や高麗川・入間川上流の山間部などにも集落が広がっている。

近世の遺跡としては、江戸時代後期から明治時代前半にかけて「飯能焼」と称された陶器を焼いた、飯能焼原窯跡などがある。

「発見された遺構」

今回の調査で発見された遺構の時期は大き

く、縄文時代前期前葉(約6500年前)と中期中後葉(約4500年前)である。

縄文時代前期前葉

竪穴状遺構1基と遺物包含層1箇所が検出された。竪穴状遺構は、平面形が方形の浅い掘り込みで、大半が調査区外に延びている。前期前葉の深鉢破片が竪穴内に落ち込むように出土した。

遺物包含層は調査区中央に分布し、層の厚さは約30cmである。完形の土器は無く、破片の状態で散漫に検出された。

縄文時代中期中葉から後葉

竪穴住居跡1軒、埋甕4基、集石15基、遺物集中10箇所、遺物包含層1箇所が検出された。

第1号住居跡は、遺構の大半が調査区域外に延びていた。平面形は円形と考えられ、柱穴と考えられるピットが検出された。縄文中期後葉の土器片が出土した。

埋甕は、遺物包含層の上面から検出された。



第15号集石土壇

いずれも口縁部から胴上部の深鉢形土器を逆位置に埋設したものである。集石の石材は破碎礫・角礫状の砂岩を中心とし、少量のチャート

- 所在地 飯能市原市場117-1他
- 実施期間(事業者) 令和5年4月～令和5年11月(埼玉県)
- 調査面積 1,454㎡
- 遺跡の種類 集落跡
- 主な遺構 縄文(住居跡1・竪穴状遺構1・埋甕4・集石15・遺物集中10・遺物包含層2)

「まとめ」

山間地を蛇行して流れる入間川上流域では、両岸の平坦面に多くの遺跡が残されている。小久住遺跡では、前期前半や中期後半の土の遺構・遺物が検出された。

縄文時代前期前葉の繊維を含む土器片が検出された。竪穴状遺構が検出されていることから、前期前葉には、周辺で集落が営まれていたと考えられる。

縄文時代中期中後葉の遺構や遺物包含層は、前期の遺物包含層の上層に形成されていた。遺物の大半は、中期後葉に限定されその時期の集落が形成されていたと考えられる。調査区が狭小のため、集落の全容は明らかにできなかったが、これらの調査成果は、狭小な段丘面における集落の設計や廃棄のあり方を比較検討する資料として貴重なものとなった。

塚原南遺跡 (第1次) 東松山市

「立地と環境」

塚原南遺跡は、埼玉県のほぼ中心に位置する東松山市大字下唐子字塚原に所在する。遺跡は都幾川に面し、遺跡の北側には都幾川によって形成された河岸段丘が認められる。南側には若殿丘陵が広がっている。ローム台地上に立地し、調査区の西側の一部が都幾川の浸食により削られ、河岸段丘の低位面となっていた。

遺跡は都幾川の屈曲部に当たり、景観としては「淵」を臨む形となっている。

遺跡の周辺には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が分布している。

旧石器時代は、遺跡の北側に所在する塚原遺跡が挙げられ、石器集中が2箇所検出された。縄文時代早期の土器、前期の土器、中期の竪穴



遺跡全景 (西から)

住居跡と土壇も検出されている。弥生時代は、中期後半以降の遺跡が多く見られ、雉子山遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出され、土器は、壺や甗が出土している。

古墳時代になると、遺跡数が急増し集落の規模も大きくなる。前方後円墳などの古墳も築造される。古墳時代後期になると古墳の築造がより活発となり、各地に群集墳が展開する。塚原南遺跡の北側の河岸段丘上には、塚原古墳群、原坂口古墳群、御嶽山古墳群が形成され、これらをまとめて下唐子古墳群と総称されている。

奈良・平安時代には、遺跡近隣の岩の上遺跡で9世紀の竪穴住居跡が検出されている。

中世では、比企氏、野本氏、高坂氏などの武士団が東松山市を中心とする比企郡に拠点を置いていた。

「発見された遺構」

縄文時代

竪穴住居跡2軒、土壇1基が検出された。前期前葉の第22号住居跡は壁柱穴が検出され、土器片や石器の剥片が出土した。

古墳時代

竪穴住居跡13軒、土壇1基、ピット1基が検出された。そのうち竪穴住居跡は、前期3軒、中期3軒、後期7軒が検出された。

前期の第19号住居跡は、一辺1.58mと小型で、大部分を木根により壊されていた。ピット2は径0.4mで、炭化物とともに、土師器の壺や甗が重なる多量に出土した。中期末頃

の第8号住居跡からは、土師器の高坏、甗、坏などが多数出土した。中期末頃の第17号住居跡からは、須恵器の坏、高坏、土師器の高坏、甗が多数出土した。石製品では、白玉と紡錘車が出土した。

後期の住居跡では、カマドのソデ部には、凝灰岩質のブロック状の石材が構築材として多用されていた。第7号住居跡は、カマドが2基、北側と東側から検出された。土師器の坏や甗の他、鉄製の刀子、滑石製の石製模造品が出土した。

奈良・平安時代

竪穴住居跡2軒、性格不明遺構1基が検出された。第14号住居跡は、カマドのみ検出され、8世紀頃の土師器坏、甗や南比企窯産の須恵器坏、末野窯産の須恵器坏蓋などが出土した。

中世

大型の溝跡が1条検出された。第1号溝跡は、調査区東側から北側に向かう幅5.0m、長さ38.5mで、調査区外に続いていた。15世紀頃のかわらけが出土した。溝跡の北辺に沿ってピット列が検出され、溝跡に付随する遺構であった可能性が考えられる。

「まとめ」

塚原南遺跡第1次調査の発掘調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構や遺物が検出された。縄文時代前期前葉の第22号住居跡は、この時期において東松山市で初の

- 所在地
東松山市大字下唐子字塚原1101他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和5年11月(埼玉県)
- 調査面積
2,400㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
縄文(住居跡2・土壇1)
古墳(住居跡13・土壇1・ピット1)
奈良・平安(住居跡2・性格不明遺構1)
中世(溝跡1)
時期不明(住居跡1・掘立柱建物跡1・土壇23・ピット79)

検出例となった。遺跡は古墳時代前期から後期にかけて営まれた集落跡であることが判明した。後期では、竪穴住居跡の軒数が多く、近接する下唐子古墳群との関連性が考えられる。このほか、奈良・平安時代では住居跡が、中世では大型の溝跡が検出され、この地における継続的な人々の生活が伺える。中世の大型溝跡は、館の堀や区画溝等の機能をもっていた可能性もあり、この地域の中世史を紐解く上で貴重な発見となった。



第7号住居跡

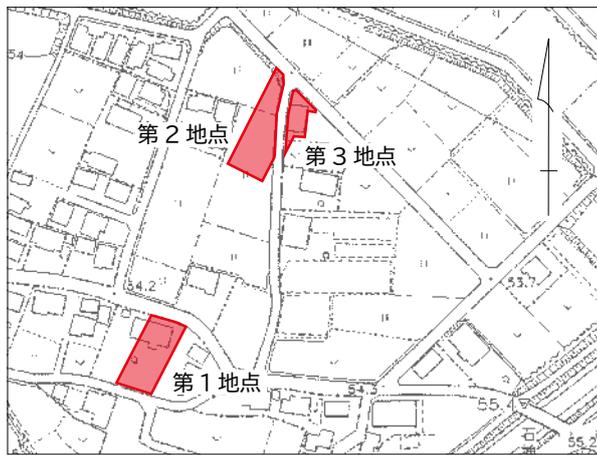
しもながつか 下長塚遺跡（第1次）上里町

「立地と環境」

下長塚遺跡は、児玉郡上里町神保原町に所在する。神流川扇状地の扇端付近の微高地上に立地する。標高約53mである。東に御陣場川が北流する。上里町の地形は、洪積台地の本庄台地、約1万年前に形成された神流川扇状地、烏川・利根川沿いに広がる沖積低地の烏川低地からなっている。

上里町域には、古墳時代から古代の遺跡が多数確認されている。本庄台地には、本庄市小島地区から上里町神保原地区にかけて旭・小島古墳群が広がり、浅間山古墳が町内に所在する。神流川扇状地には、北稻塚遺跡、金久保内出遺

I 令和五年度に調査をした遺跡



調査区位置図

「発見された遺構」
調査区は3箇所にわかれ、南から第1地点、第2地点、第3地点と呼称した。
第1地点
古墳時代後期と中・近世の遺構が検出された。古墳時代は、竪穴住居跡が5軒確認された。第1号住居跡は、規模が主軸長3・0m、幅3・4mで、カマドは東壁に設置されていた。
中・近世は、土壇7基、ピット49基が検出された。いずれも覆土は暗灰褐色土で、天明3



第1地点（南から）



第2、第3地点（南から）



第6号住居跡

年（1783）の浅間山の噴火によって降下した浅間A軽石と思われる白色粒子が含まれていた。
第2地点
古墳時代後期と中・近世の遺構が検出された。古墳時代は、竪穴住居跡2軒が検出された。第6号住居跡は、調査区北端に位置する。主軸長3・25m、幅3・50mで出土した遺物は少ない。カマドは南側にあり、煙道の出口からは底部を欠いた土師器の坏が出土した。第7号住居跡は、第6号住居跡の南に位置する。規模は確認できた範囲で、主軸長が6・0m、幅が2・5mであった。西半が調査区外に延びる。遺物はカマドの焚口周囲に集中し、土師器坏やカマドの構築材に転用されていた土師器甕が出土した。焼土や炭化物を含む暗褐色土が厚く堆積していた東壁の中央付近では、完形の土師器坏がまとまっていた。時期はいずれも7世紀代と考えられる。

中・近世は、土壇15基、ピット88基が検出された。出土遺物は少なかった。
第3地点
奈良・平安時代の土壇4基、ピット14基が検出された。
「まとめ」
第1次調査では、古墳時代後期の遺構が主体であった。第1地点と第2地点の双方から、竪穴住居跡が検出された。同一の集落かは今後の調査結果を待つ必要があるが、神流川扇状地の扇端付近に古墳時代の集落の様相を解明する貴重な調査結果となった。

- 所在地
児玉郡上里町神保原町1055-8他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和5年10月(埼玉県)
- 調査面積
1,361.7㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
古墳(住居跡7)
奈良・平安(土壇4・ピット14)
中・近世(土壇22・ピット137)

II 令和五年度に刊行された報告書

発掘調査された遺跡の成果は、調査報告書としてまとめられます。バラバラに出土した破片を復元して元の形にするなどの地道な作業をし、これら一連の作業を「整理」と言います。調査報告書を刊行し、発掘調査は終了となります。今年度は4冊の調査報告書を刊行しました。



1



2



3



4

1 482集『栗橋宿跡Ⅷ』

2 481集『栗橋宿
西本陣跡Ⅱ』

3 480集『北2丁目
陣屋跡Ⅱ』

4 483集『長竹遺跡Ⅵ』

資料所蔵・写真提供：
埼玉県教育委員会

令和5年度 刊行報告書



- | | | |
|--------|---------------------|------------------------------|
| ■ 480集 | 『北2丁目陣屋跡Ⅱ』
(久喜市) | 首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告 |
| ■ 481集 | 『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』
(久喜市) | 首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告 |
| ■ 482集 | 『栗橋宿跡Ⅷ』
(久喜市) | 首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告 |
| ■ 483集 | 『長竹遺跡Ⅵ』
(加須市) | 首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告 |

Ⅲ 発掘資料の保存と活用

1 保存・活用事業（埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託事業）

一 資料の管理



出土品の写真撮影



カラースライドの選択

- ・ 出土品の写真撮影 2,500 点
- ・ 出土品のデータ作成 2,500 点
- ・ 写真整理台帳の作成 34,232 コマ
- ・ 実測図整理台帳の作成 3,083 枚
- ・ カラースライドの複製作成（フォト DVD）800 コマ

二 保存処理



出土金属製品の樹脂含浸処理



出土木製品の PEG 含浸処理

- ・ 出土金属製品の保存処理 412 点
- ・ 出土木製品の保存処理 250 点

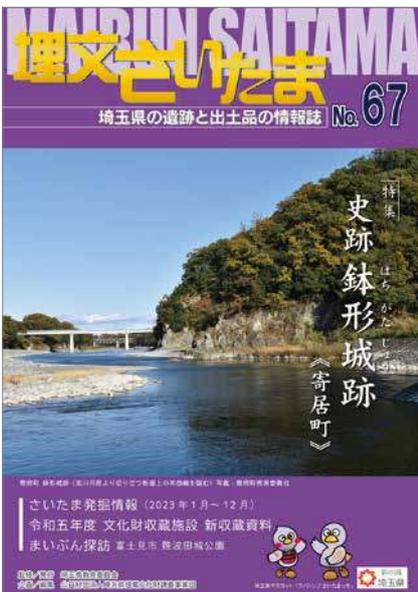
三 情報収集



図書室

- ・ 県内外の埋蔵文化財に関する情報収集（博物館、教育委員会発行物、現地資料等） 470 件
- ・ 図書の収集・整理保管（県教委受入図書の整理、収納） 462 点
- ・ 図書データ作成（内訳：県教委 295、収蔵施設 133、事業団 2,338 冊） 2,766 冊
- ・ 資料室利用者等への対応（随時） 134 人
- ・ 研究・学習等支援 195 人

四 印刷物の刊行・配布



『埋文さいたま』第 67 号
特集：「史跡鉢形城跡（寄居町）」

- ・ 学習用キットカタログの作成
PDF ファイル WEB 公開
- ・ 埋蔵文化財ニュース（『埋文さいたま』第 67 号）
PDF ファイル WEB 公開
- ・ 遺跡見学会資料の作成（参加者用 500 部×2回）
1,000 部

五 出前授業「古代から教室へのメッセージ」

遺跡から出土した土器や石器、埴輪などを小中学校の学習用教材として活用しています。ふだん発掘調査等に
従事している専門職員が、埼玉県内から出土した本物の土器や石器、埴輪などを持参して授業をお手伝いします。



令和5年度「古代から教室へのメッセージ」実施校一覧（40校）

1	4/28 (金)	三郷市立戸ヶ崎小学校	21	6/30 (金)	八潮市立中川小学校
2	5/9 (火)	熊谷市立熊谷南小学校	22	7/3 (月)	三芳町立上富小学校
3	5/15 (月)	川島町立つばさ南小学校	23	7/4 (火)	行田市立南小学校
4	5/23 (火)	川口市立上青木小学校	24	7/5 (水)	加須市立北川辺西小学校
5	5/25 (木)	上尾市立鴨川小学校	25	7/7 (金)	行田市立西小学校
6	5/30 (火)	新座市立片山小学校	26	7/10 (月)	戸田市立戸田第二小学校
7	6/1 (木)	さいたま市立大宮別所小学校	27	7/11 (火)	八潮市立柳之宮小学校
8	6/5 (月)	加須市立樋遣川小学校	28	7/14 (金)	川口市立戸塚北小学校
9	6/6 (火)	小鹿野町立小鹿野小学校	29	7/18 (火)	行田市立忍中学校
10	6/8 (木)	久喜市立江面小学校	30	8/30 (水)	志木市立志木第三小学校
11	6/9 (金)	八潮市立大曾根小学校	31	8/31 (木)	三郷市立高州小学校
12	6/12 (月)	行田市立太田中学校	32	9/1 (金)	草加市立八幡北小学校
13	6/13 (火)	春日部市立武里南小学校	33	9/7 (木)	狭山市立入間川小学校
14	6/15 (木)	草加市立稲荷小学校	34	9/14 (木)	行田市立桜ヶ丘小学校
15	6/16 (金)	上里町立神保原小学校	35	9/15 (金)	熊谷市立江南南小学校
16	6/19 (月)	白岡市立大山小学校	36	9/27 (水)	秩父市立久那小学校
17	6/20 (火)	川口市立芝小学校	37	10/5 (木)	越谷市立弥栄小学校
18	6/23 (金)	加須市立原道小学校	38	10/12 (木)	鴻巣市立松原小学校
19	6/26 (月)	松伏町立松伏第二小学校	39	11/27 (月)	美里町立東見玉小学校
20	6/27 (火)	本庄市立見玉小学校	40	12/18 (月)	川口市立柳崎小学校

六 学習用キットの貸出し

運びやすく梱包した学習用キットを無料で貸出しています。地域別・テーマ別など、約120セットの中から選べます。社会科や図工の教材として、あるいは地域の郷土学習の資料として、ご利用ください。参考パネルや体験用の火おこしセットなども用意しています。

『学習用キットカタログ』

各キットの内容を紹介しています
※ホームページで公開しています



テーマ別セット（土偶）



地域別セット（西部）西原遺跡



テーマ別セット（石の道具）

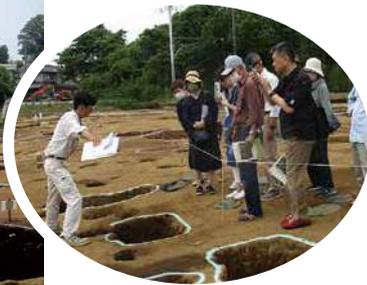


地域別セット（北部）中堀遺跡

学習用キットの貸出し（令和5年度）

394 セット

発掘調査で得られたさまざまな成果や出土遺物をいち早く県民の皆さまにお伝えしています。発掘途中の遺跡の様子や、出土した遺物などを調査担当者がわかりやすく説明し、疑問や質問にもお答えします。
土の中に埋もれていた身近な歴史に触れてみてはいかがでしょうか。



令和5年度第1回
令和5年5月28日(日)
宮前遺跡(鴻巣市)
見学者:151人



令和5年度第2回
令和5年9月16日(土)
清水南遺跡(上里町)
見学者:106人



令和5年度第3回 埼玉県業務委託事業
令和5年10月1日(日)
金久保内出遺跡(上里町)
見学者:134人



令和5年度第4回 埼玉県業務委託事業
令和6年2月3日(土)
権現遺跡・
二ノ耕地遺跡(吉見町)
見学者:134人





■ ほるとま展 2023「江戸おしゃれコレクション」

1	ティアラ 21 (熊谷市)	令和 5 年 8 月 26 日 (土)・27 日 (日)	見学者：242 人 体験者：87 人
2	モラージュ菖蒲 (久喜市)	令和 5 年 9 月 23 日 (土・祝)・24 日 (日)	見学者：1,407 人
3	ららぽーと富士見 (富士見市)	令和 5 年 10 月 21 日 (土)・22 日 (日)	見学者：1,858 人
4	そごう大宮店 (さいたま市)	令和 5 年 11 月 11 日 (土)・12 日 (日)	見学者：4,406 人
5	イオンスタイル入間 (入間市)	令和 5 年 12 月 9 日 (土)・10 日 (日)	見学者：1,066 人 体験者：120 人



考古学講座



展示



■ 令和 5 年 里帰り展「上里町の遺跡から発見されたむかしの道具」

上里町立郷土資料館	令和 5 年 7 月 29 日 (土) ~ 8 月 27 日 (日)	
考古学講座	令和 5 年 8 月 6 日 (日)	29 人受講



お仕事見学ツアー



缶バッジづくり



■ 令和 5 年「県民の日まいぶんフェスタ」

埼玉県文化財収蔵施設	令和 5 年 11 月 14 日 (火)	来場者：137 人
------------	----------------------	-----------

四 公開考古学講座

令和 5 年度ほるとま考古学セミナー	テーマ：「大木戸遺跡の低湿地調査－縄文時代の宝箱－」(オンライン開催)	令和 6 年 2 月 15 日 (木) ~ 22 日 (木)	256 人配信
--------------------	-------------------------------------	--------------------------------	---------

Ⅲ 発掘資料の保存と活用

五 印刷物等			
展示解説パンフレット	ほるとま展 2023	発行：令和 5 年 8 月	4,000 部
展示解説パンフレット	里帰り展（上里町郷土資料館）	発行：令和 5 年 7 月	500 部
発掘情報チラシ		発行：随時	500 部
年報	「さいたま埋文リポート 2023」（年報 43）	発行：令和 5 年 9 月	500 部
研究紀要	「研究紀要」第 38 号	発行：令和 6 年 3 月 22 日	500 部
六 研修等の受入れ			
熊谷市立吉見小学校 2 年生 施設見学		令和 5 年 6 月 14 日（水）	40 人受入
上里町立賀美小学校 遺跡見学（上里町金久保内出遺跡）		令和 5 年 6 月 23 日（金）	30 人受入
教員ボランティア体験		令和 5 年 8 月 9 日（水）	1 人受入
東京成徳大学深谷中学校 1 年生 出前授業		令和 5 年 8 月 28 日（月）	19 人受入
原市場の古へを探らふ会（小久住遺跡）		令和 5 年 9 月 26 日（火）	10 人受入
日本大学文理学部地理学科実習（砂原遺跡）		令和 5 年 11 月 2 日（木）	12 人受入
きらめき市民大学施設見学		令和 5 年 11 月 8 日（水）	25 人受入
吉見町立西が丘小学校施設見学		令和 5 年 12 月 1 日（金）	15 人受入
勝場老人クラブ（清水南遺跡）		令和 6 年 2 月 26 日（月）	23 人受入
群馬県千代田町保護調査委員		令和 6 年 2 月 29 日（木）	4 人受入
平成国際大学ダンス部（土偶展示解説） 会場：パストラル加須		令和 6 年 3 月 6 日（水）	
東京農業大学第三高等学校附属中学校 職場体験		令和 6 年 3 月 11 日（月）～13 日（水）	5 人受入
One Day インターンシップ（オープンカンパニー）【発掘調査】		令和 5 年 7 月 6 日（木）～7 日（金）	19 人受入
One Day インターンシップ（オープンカンパニー）【整理報告書作成業務】		令和 5 年 11 月 16 日（木）～17 日（金）	7 人受入
One Day インターンシップ（オープンカンパニー）【資料保存活用】		令和 5 年 12 月 4 日（月）～5 日（火）	中止
七 講師等の派遣			
加須市退職校長会	演題：「“埼玉県の考古学” 近年の発掘成果と普及活動」	令和 5 年 5 月 10 日（水）	35 人受講
行田市民大学同窓会定期総会に伴う講演会	演題：「行田・北大竹遺跡より大量の子持勾玉、祭祀具発見」	令和 5 年 5 月 31 日（水）	120 人受講
鴻巣郷土史会講演	演題：「平右衛門遺跡の調査成果から」	令和 5 年 6 月 11 日（日）	23 人受講
鴻巣郷土史会講演	演題：「家康の入国と忍城」	令和 5 年 7 月 30 日（日）	24 人受講
行田市郷土博物館ふるさと講座	演題：「子持勾玉を中心に、近年の北大竹遺跡発掘成果について」	令和 5 年 10 月 22 日（日）	25 人受講
久喜市立郷土資料館特別展関連講座		令和 5 年 11 月 19 日（日）	24 人受講
八 その他			
友山まつり 遺物展示解説		令和 5 年 4 月 29 日（土・祝）	236 人参加
全埋協関東ブロック 関東考古学フェア スタンプラリー		令和 5 年 7 月 23 日（日）～11 月 27 日（月）	294 人応募
全埋協関東ブロック 関東考古学フェア「発掘された関東の遺跡 2023」	遺跡発表会 会場：さいたま文学館 文学ホール	令和 5 年 10 月 15 日（日）	115 人来場
東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー	テーマ：「旧石器から縄文へ」 会場：荏原文化センター（東京都品川区）	令和 6 年 1 月 28 日（日）	200 人来場
大東文化大学リカレント教育（観光歴史ガイド養成プログラム）	科目：史跡ガイド実習〔講義・現地実習 各 1 日（各 4 時間）〕 講義：令和 5 年 9 月 30 日（土）会場：東松山キャンパス 現地実習：令和 5 年 10 月 8 日（日）会場：吉見百穴・文化財収蔵施設		受講生 12 人
事業団オリジナルグッズの企画・製作			
YouTube 動画配信（県民への事業団 PR）	第 1 回配信 8 月		346 回再生
	第 2 回配信 3 月 8 日（金）		394 回再生
SNS による遺跡見学会等の各種情報提供	X (旧 Twitter) フォロワー総数：1,691 人		令和 5 年度ポスト数：147 回
	LINE 登録総数：260 人		令和 5 年度発信数：35 回
九 研究及び研究支援等			
研究・学習等支援（収蔵展示室など）		令和 5 年 4 月～令和 6 年 3 月	190 人受入

IV 事業団の概要

1 設立の趣旨と目的

古くから多くの人々が生活を営んできた埼玉県の地には、先人の生活の足跡をものがたる埋蔵文化財が数多く残されています。これらの文化財は、郷土埼玉の歴史を解明する上で必要不可欠な資料であるとともに、貴重な文化遺産でもあります。これを保護し後世に伝えることは、今日の我々の責務であると言えます。

一方において、県内経済の安定成長を確保し、県民生活の向上を図るため、各種開発が盛んに実施されており、その事業が埋蔵文化財の包蔵地に及ぶことも少なくありません。そうした場合には、緊急に発掘調査等の保護措置を講ずることが必要です。

埋蔵文化財の保護と県土の開発の調和を図るためには、文化財保護法の定める精神を基本理念として、公共開発に適切に対処していくことが重要です。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、こうした趣旨の下で、県内の埋蔵文化財の調査・研究、記録保存を行うとともに、埋蔵文化財の保護思想の啓発と普及を図ることを目的として、昭和五十五年に埼玉県の出資により設立されました。

2 略沿革

昭和五十五年四月 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立。事務所を県パンビ
ル（浦和市岸町7-6-13）内に置く。

2部4課制、役員11名（理事9、監事2）、事務局員32名。

昭和五十七年四月 事業団本部事務所を大宮市榎引町2丁目4-9-9番地に移転。2
部5課制、役員12名（理事10、監事2）、事務局職員52名。

昭和六十二年四月 大里整理事務所開設（大里郡大里村箕輪）。

平成元年十月 事業団本部事務所が大里郡大里村大字箕輪字船木8-1-3に移転。

平成二年四月 埼玉県立埋蔵文化財センター設立に伴い、事業団本部事務所の
所在地を同センター内に置く（大里郡大里村大字箕輪字船木
884番地）。

平成三年八月

大宮整理事務所を大宮市東大成町2丁目557番地5に設置。

3 組織の概要

平成十年六月

大里村の区画整備事業に伴い、事業団本部の住所表示を大里郡大里村船木台4丁目4番地1に変更。

平成十二年三月

大宮整理事務所廃止。

平成十四年四月

大里村の町制施行により、大里町となる。

平成十七年十月

市町村合併により、事業団本部の住所表示が熊谷市船木台4丁目4番地1に変更。

平成十八年四月

埼玉県立埋蔵文化財センター廃止により、施設名称が埼玉県文化財収蔵施設となる。事業団本部事務所の所在地を同施設内に置く。

平成二十四年四月

公益財団法人に移行する。

(1) 事業

- ① 埋蔵文化財の発掘調査・記録作成
- ② 埼玉県教育委員会から委託された保存活用業務による資料保存・普及事業
- ③ 県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
- ④ 埋蔵文化財保護思想の啓発と普及

(2) 設立年月日

昭和五十五年四月一日

(3) 出資者

埼玉県

(4) 基本財産

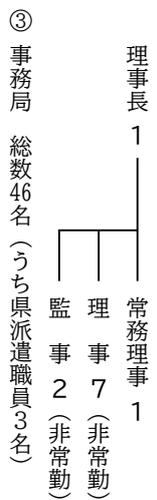
1,000万円

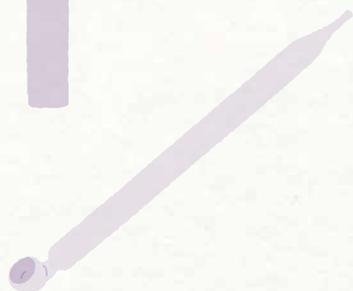
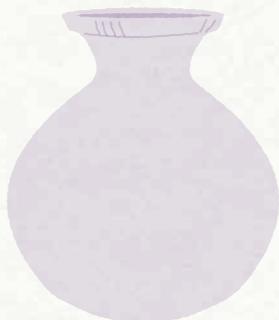
(5) 事務所所在地

埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

(6) 組織図及び人員

- ① 評議員 総数5名（非常勤）
- ② 役員 総数11名（常勤2名、非常勤9名）





さいたま埋文レポート 2024 年報 44 (令和5年度版)

令和6年10月31日発行

編集・発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1
TEL 0493-39-3955 FAX 0493-39-3579

ホームページ



X



LINE



YouTube

